

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.92
2006

10
月号

トピックス

七大戦 14年ぶり5回目の総合優勝!

大阪大学・グローニンゲン大学交流シンポジウム開催

クローズアップ

「子どものこころのひずみ」を克服

—子どものこころの分子統御機構研究センター—

ナウスベシャル

「大阪大学中之島ヘルスケアクラブ」オープン



大阪大学広報誌

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
キャンパスニュース	17
ナウススペシャル	28
表 彰 等	30
人 事	33
名誉教授リレー随想	36
名誉教授の近況	38
討 報	41
インフォメーション	42
インタビュー	48
海外レポート	50
クラブ&サークル紹介	54
ガイドマップ	55
交流協定大学紹介	56



表紙写真：共通教育管理講義棟
(大学教育実践センター(豊中))
撮 影：理学研究科助教授 山本 仁
表紙デザイン：株式会社ココティエ

「七大戦」14年ぶり5回目



大阪大学・グローニンゲン大学 交流シンポジウム開催

大阪大学の欧州の海外拠点のあるオランダ・グローニンゲン大学から、10月2日(月)、3日(火)の両日、Kuipers 総長、Zwarts 理事を始め、約20名の一行が来学されました。

2日午後には、大阪大学中之島センターにおいて、両大学の総長を交え「大阪・グローニンゲン：日蘭交流の将来について」と題するパネル会議、3日午後には吹田・豊中両地区に分かれ、研究交流の実績や今後の研究交流の方向をめぐる発表・討論会、留学説明会などが開催されました。

詳しくは「役員室だより」(16ページ)をご覧ください。

の総合優勝！」

－ 宮原総長歓喜の胴上げ 初秋のキャンパスで宙に舞う －



7月初旬から2カ月間にわたり大阪大学主管で開催された、第45回全国七大学総合体育大会（通称、七大戰）において、大阪大学が14年ぶり5度目となる総合優勝を果たしました。

今回は、最終競技の卓球（男子・女子）まで、北海道大学・大阪大学・名古屋大学の3校が、10点差以内にひしめくデットヒートを繰り返しましたが、接戦を制し、見事に大阪大学が栄冠を勝ち取りました。

9月16日(土)に豊中キャンパス第一体育館において行われた閉会式では、田村祐一（工・4年）大会実行委員長による挨拶が行われた後、大和谷 厚総長補佐（学生生活委員会委員長）から優勝旗・優勝杯・ペナントが、（社）学士会から優勝トロフィーが、鈴木 健（基・4年）体育会委員長に授与されました。さらに、次回（第46回）主管校である京都大学の実行委員長からは、次回大会の大会マスコットの披露とともに、大会への意気込みが熱く語られました。

9月27日(水)には、吹田キャンパス、レストラン「匠」で優勝報告会が開催され、宮原秀夫総長から大会の役員並びに競技者に対し慰労の言葉が述べられ、「総長在任中に是非胴上げされたい」との念願どおりクラブ員等の手による「胴上げ」が行われ、総勢120名の参加者から祝福の拍手がおくられました。また、鏡割りや優勝競技の代表者によるスピーチも行われるなど、会場は終始盛り上がり、大学が一体となって優勝の喜びに沸きました。さらに、早くも来年に向け、大阪大学初の主管校破りや連覇を期待する声もあがるなど、次回大会への激励が、会場の至る所で行われました。学業のみならず課外活動を通して、大阪大学のパワーを存分に発揮できた大会でした。

七大戰の詳しい結果は、キャンパスニュース（27ページ）をご覧ください。



「子どものこころのひずみ」を克服

— 分子生物学と児童精神医学の連携融合による新たな研究領域の創生 —

子どものこころの分子統御機構研究センター 特任教授 谷 池 雅 子

■ 子どものこころの分子統御機構研究センターの設置

少子化が進む一方で、少年による凶悪な犯罪が後をたない21世紀日本の最大の社会的課題は子どものこころのひずみといっても過言ではありません。

とりわけ、広汎性発達障害、注意欠陥／多動性障害（ADHD）等の発達障害を持つこどもは、近年その頻度が高いことがわかってきました。これらの子どもたちは、個々のニーズに応じた教育がなされないと学校で落ちこぼれてきやすいこと、また適切な対応がなされないと大きなこころの負担をかかえながら社会生活をおくることが多いと言われ、そのことが思春期・成人期における不適応や「引きこもり」、反社会的行為等の二次障害につながる可能性があることが知られています。このように、子どものこころの問題を考える時に、発達障害児の適切な療育・教育は欠かすことができません。ところが、発達障害の病因に関してはまだ不明の点が多く、生物学的指標もないことが、教育・療育上の大きな支障となっています。

更に、最近の研究によると成人期の統合失調症やうつ病の素因は小児期に形成されるとされており、このような成人期の人格障害・精神疾患の基盤は、遺伝性要因と小児期の発達環境に関係することが示唆されていますが、科学的なメカニズムはまだ明らかになっていません。

子どものこころのひずみの原因を科学的かつ学際的に探るためには、臨床家と分子生物学や神経画像等発達障害の研究に必要な技術に卓越した基礎研究者の連携が欠かせません。このような経緯で、平成18年4月、文部科学省の支援のもとに、大阪大学と浜松医科大学が連携協力して『子どものこころの発達研究センター』による教育研究事業がスタートしました。この事業は大阪センター・浜松センターの両者により担われ、金沢大学医学系研究科が参画します。大阪センターでは子どものこころの障害の分子機序の解明とその治療法の開発を目指します。浜松センターでは中京大学の協力を得て子どものこころの脳画像・疫学研究に取り組みます。両センターで得られた成果に基づいて新たな教育・療育方法を開発していくことを究極の目的としています。

基礎医学と臨床医学、看護、教育、福祉との連携により、

「子どものこころの発達」

を科学的に理解するために新しい

研究領域を創生し、その成果に

基づいて、「子どものこころのひずみ」

を克服するための革新的教育研究を

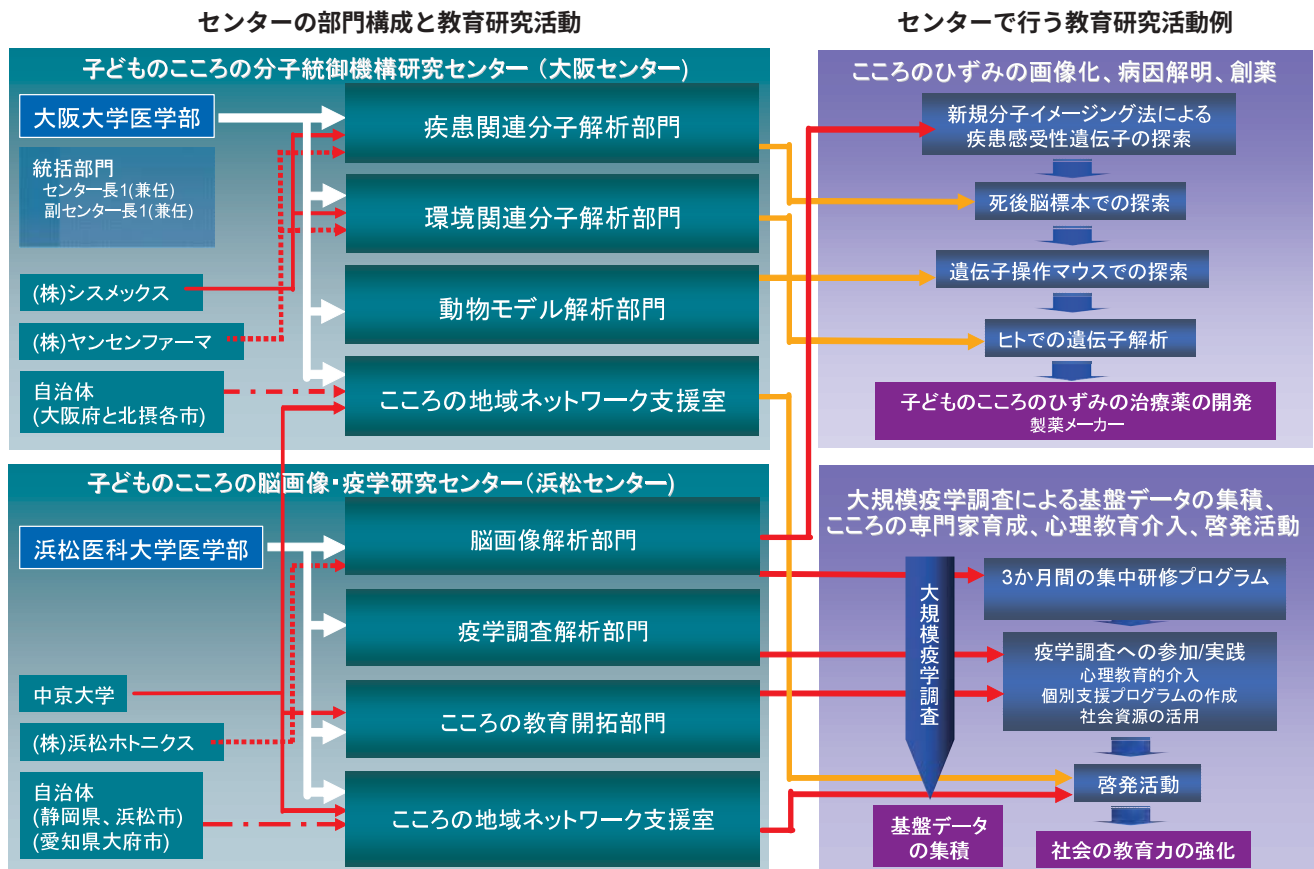
提唱します。



大阪センター開設シンポジウムの聴衆

今年7月15日、8月19日には、それぞれ大阪・浜松においてセンター設立シンポジウムが開催されましたが、約400名の参加者があり社会的な関心の強さを再度認識することになりました。

「子どものこころの発達研究センター」による教育研究事業



【大阪センター】

・「疾患関連分子解析部門」

疾病に関与する遺伝子を解明し、その異常と脳の発達との相関を解明すること、また異常遺伝子・蛋白の制御機序の開発を行い治療法開発への道を開きます。

・「環境関連分子解析部門」

現代社会における環境要因が子供のこころの成長発達に及ぼす影響を科学的に解析します。

・「動物モデル解析部門」

神経ペプチドやその受容体のノックアウトマウスやトランスジェニックマウスを作成し、こころのひずみを来す分子機序を解明します。

・「こころの地域ネットワーク支援室」

地域のネットワーク作りの支援と学部学生教育を担当します。

【浜松センター】

・「脳画像解析部門」

産学官連携により、新しい脳機能画像解析法を開発して認知機能の詳細な画像化を行い、障害に関係する脳部位を特定します。

・「疫学調査解析部門」

特定地域の公立小、中学校で、コホート法を含めた大規模な疫学研究を行い、予兆となるべき指標を見出します。

・「こころの教育開拓部門」

これまでの実績と「疫学調査解析部門」で得られる知見を基に心理教育的介入法を開発します。

・「こころの地域ネットワーク支援室」

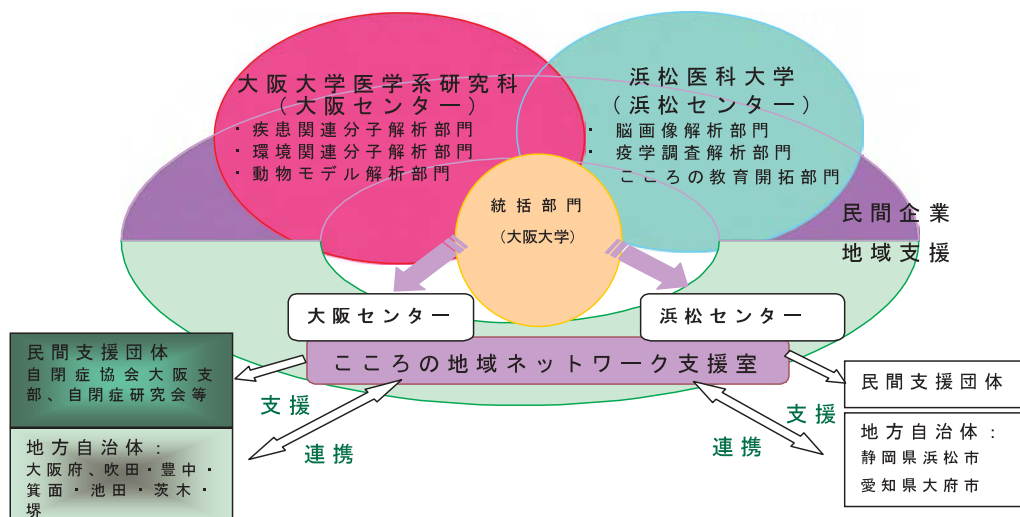
大阪センターと同様に、地域のネットワーク作りの支援と学部学生の教育を担当します。

■ 事業の取組内容

臨床研究を行う上で、厳密な倫理面のチェックは欠かせません。研究を統括する大阪大学では、倫理・情報管理室を新設し、各々の研究において個人情報の漏洩防止や倫理的配慮が十分に保たれているかについて厳密に管理と指導を行います。事業は大阪センターと浜松センターの連携によって行われますが、大阪センターの現況を紹介します。

精神科と小児科の協力の下、大阪大学医学部附属病院に「子どものこころの発達外来」を設置し、診療の場を設けると同時に、月に一度の定期会合を通じて症例の検討、こどものこころの発達に関するリサーチリソース・データベース（ゲノムDNA、心理検査、脳画像、生理検査等からなる）を構築し、臨床研究の機会を提供することになりました。

発達障害児の教育・療育に関しては家庭・学校や福祉との連携が欠かせませんが、大阪大学では、平成17年から公立学校の教諭に対して発達障害に関する講演を行っています。平成18年度には、堺市との受託研究として、発達障害の疫学調査、発達障害の療育支援、就労促進のための啓発活動、発達障害診断法の開発を行う予定です。更には、地域ネットワーク支援部門の永井教授が中心となって、家族の療育指導を目的として『広汎性発達障害児のペアレントトレーニング』を導入します。このような臨床現場での実績活動が研究活動の基盤となります。



■ 大阪センターにおける研究について

- 1) 小児期の発達の障害が発症のリスクとなっていると考えられている統合失調症などの成人における精神疾患の感受性遺伝子をリサーチリソース・データベースを利用して見出し、発達障害児において検討します。
- 2) 各種統合失調症モデルマウスにおける脳内の神経伝達物質含量および代謝物の変化を定量するとともに、微量脳透析法を用いて遊離動態の変化を検討します。
- 3) 子どもとその親を対象として、児童虐待や過度ストレスに伴う外傷後ストレス障害（PTSD）による脳機能変異を、ヒト脳画像と動物実験による海馬神経新生の分子・細胞生物学的手法により解析し、殊に、神経新生に関しては、ストレスの主要因子である副腎皮質ステロイドホルモンによる神経新生制御の分子機構を追求します。シナプス特異的蛋白質の機能解析により、シナプス形成・機能異常による精神遅滞・精神疾患発症の分子機構を追求します。
- 4) 追視時の脳血流の変化を近赤外分光法（NIRS）によって解析することによって発達障害児における感覚情報統合機能を解析します。
- 5) 睡眠障害が子どものこころの発達に及ぼす影響を調べ、断眠モデルマウスを用いて断眠が発達に関連する遺伝子の発現に及ぼす影響を調べます。

■ 子どものこころの専門家をめざして

当センターでは、医師、看護師、基礎研究者、臨床心理士、教師等職種を超えて「子どものこころの専門家」育成を目指しています。

・研究者の育成

浜松医科大学、大阪大学、金沢大学からなる連合大学院を設立して、共通カリキュラムを作成し、衛星を用いた遠隔講義や、共同実習を通じて専門家を育成することを計画しています。

・専門家の育成

大阪大学医学部附属病院内の「子どものこころの発達外来」を専門医や看護師にとっての実習の場といたします。また、浜松センターの協力において、専門家養成連続セミナーを実施します。

・学部学生教育

発達障害児のペアレントトレーニングに保健学科学生が参画することにより、発達障害に関わるコメディカルの育成の場にします。

・啓発活動

「各自治体と共催で、子どものこころの問題の捉え方や対処方法に関するセミナーや講演会を行い啓発活動に努めます。研究成果は、シンポジウムや公開セミナーの形で一般市民に公開します。



■ 事業達成による波及効果（学問的效果、社会的効果、改善効果等）

- (1) 基礎・臨床・教育が一体となった研究により、“子どものこころのひずみ”の原因が分子レベルで解明できます。この原因を制御することにより、科学に立脚した新規の治療法の開発が可能となります。
- (2) 本センターでは、小学生・中学生を対象に、我が国最初の疫学的追跡調査に着手するとともに、心理教育的介入の手法とその評価法の開発に着手し、その一部を教育現場において実践します。このことにより、こころのひずみを有する子どもの早期発見と教育による治療効果の評価が可能となります。
- (3) 子どものこころのひずみに対応できる専門家の育成に力を注ぎ、その専門家は、地方自治体と共同で、教育現場や地域社会での啓発・教育活動を担います。本センターの実績と経験を全国展開し、最終的には社会そのものが子どものこころのひずみに対応できるようになることを目指します。



HP アドレス <http://www.med.osaka-u.ac.jp/jp/sisetu/child.html>

役員室だより

2006.10 Vol.14

大学における教育研究においては、全教員が強い使命感はもとより高い倫理観を備えていることが必要です。本学ではこのたび、研究活動における不正行為の防止に努めるため、研究公正に関する遵守要綱等を制定しました（『研究推進室』の項参照）。本学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」及び教育目標である「教養・デザイン力・国際性の修得」と共に、本学の教育研究活動の根底をなすものとして、教員をはじめ全構成員が銘記してまいりたいと考えます。

さて、先般、国立大学法人評価委員会から公表された平成17年度業務実績評価においては、本学は中期目標・中期計画の実現に向け、順調な進捗を見せているとの高い評価を得ることができました（『評価・広報室』の項参照）。

また、7月中旬から約2か月にわたって開催された第45回全国七大学総合体育大会において、本学は、全出場選手が並々ならぬ決意で臨み戦った結果、見事14年ぶり5回目の総合優勝を果たしました。競技に出場した全選手諸君並びに大会運営に携わった皆様に感謝いたします。

各室の検討状況

総合計画室

施設マネジメント委員会

◇構内交通規制に関する見直しについて

施設マネジメント委員会では、構内の交通問題及び交通事故防止に対処し、より良い教育研究環境の整備を図るため以下の現状や問題点等を踏まえつつ、24時間入構規制の方法や当日入構車両への対応措置になど、構内交通規制に関する見直しとその検討を行っています。

- ① 建設計画上、これ以上の駐車スペースの確保が困難であり、現状の駐車場による運用が必要であること。
- ② 現状は特定時間の規制であるため、特定の者が夜間のみの出入りを行っている、いわゆる無料駐車による入構をしていること。
- ③ 特に吹田地区においては、当日入構料金での入構が可能であり、通常許可申請資格を有しない者の入構車両が多数あること。
- ④ 国の施策として「京都議定書目標達成計画」に基づき、地球温暖化・ヒートアイランド対策への対応が必要となっていること。

◇『大阪大学環境報告書 2006』の公表

地球温暖化をはじめとする地球環境改善対策の取組の一環として、平成17年4月1日付けで「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」（環境省）が施行され、本学においても、毎年、事業年度終了後6ヶ月以内に「環境報告書」の公表が義務付けられました。これを受け本学としても初めてとなる「大阪大学環境報告書 2006」を作成し、公表しました。昨年度1年間の環境パフォーマンスデータや環境保護推進活動事例を取り上げ、読みやすい紙面を心掛けました。

本報告書は大学ホームページにも掲載しており、「法人情報の公表」ページからアクセスできます。

(<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/report06.pdf>)



多様な人材活用推進のための対応方策等に関する提案

本年4月から、総合計画室の下に「多様な人材活用推進委員会」が設置され、本学における多様な人材活用推進のための方針と方策について、検討を重ねてきたところですが、この度、必要な施策を取りまとめた提案が提出され、総合計画室会議、部局長会議及び役員会において、①「保育所の整備」及び②「NPO法人の設立」など、具体的方策を推進していくことが認められました。

なお、今後、同委員会において、提案事項の実現に向けて、更に鋭意、検討することとしています。

(同提案については、下記に全文を掲載しますが、添付資料については一部のみ掲載しています。全資料は、学内専用ホームページをご覧ください。)

多様な人材活用推進のための対応方策等に関する提案

総合計画室長

鈴木 直

多様な人材活用推進委員会委員長

沖田 知子

多様な人材活用推進委員会（以下、委員会）では、今年4月の設置以来、大阪大学における多様な人材活用推進のための方針と方策について、検討を重ねてまいりました。その結果、この問題は、大阪大学の戦略としての位置づけのもと、具体的な支援の実施体制を整える必要があると考え、必要な施策を以下のようにまとめました。

- (1) 役員会、経営協議会等のトップマネジメントに携わるメンバーの理解を得、数値目標を設定するなど、必要な施策を実行する。
- (2) 支援・相談活動を日常業務として実施する制度と体制を確立する。
- (3) 保育所等、支援のための環境を整備する。

以下、これらの施策の具体案を提示します。

1. 保育所の整備について

委員会では、当面の課題である男女共同参画に重きを置き、特に研究・仕事や育児の両立支援策として、保育所の整備は緊急の要件であると認識しております。大阪大学においては、以前から「たけのこ保育園」（現状20名）と「まきば保育所」（現状24名）が自主運営されていますが、その狭隘さ故に十分な対応ができないなど、七大学においてもひととき劣悪な状況にあります。

したがって、まず始めに、保育施設の新築を含む整備を行い、大阪大学の保育所として、学内の要望に対応できる体制を整えることを計画いたしました。今後は、施設マネジメント委員会の協力を得て推進いたしたく、そのための基本設計案を以下のように考えます。

- (1) 「たけのこ保育園」を新築し、定員を75名とする。
- (2) 「まきば保育所」を整備し、定員を30名とする。
- (3) 豊中地区に、25名定員の保育所を新設する。
- (4) 以上の保育所の新設・整備費および毎年の運営費を大阪大学が拠出する。
- (5) NPO法人を設立し、保育所の運営等を委託する。
- (6) その他、保育条件は別紙のとおりとする。（別紙添付省略）

2. NPO法人の設立について

保育所の運営をはじめとし、学会時などの臨時保育所の設置や、育児支援要員の派遣などの業務を委託する受け皿としてNPO法人「阪大ワーク&ライフサポート」を設立し、両立支援策を推進いたしたく、その基本設計案を以下のように考えます。

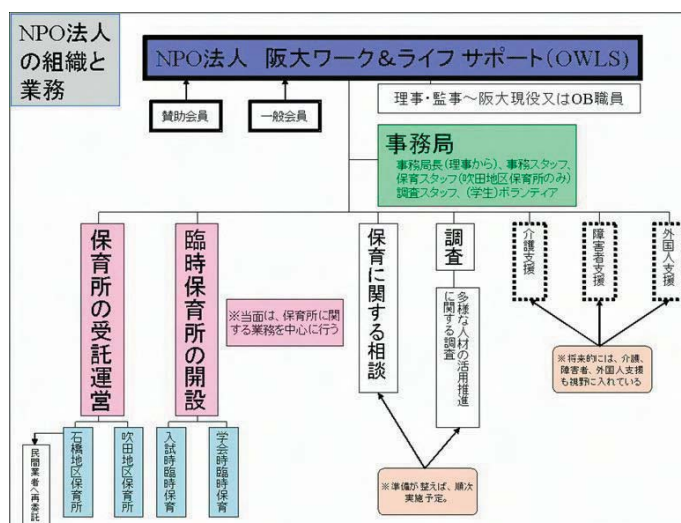
- (1) NPO法人に業務委託することにより、学内のリソースの有効利用とともに、大学運営における透明性の担保と経費の抑制を図る。
- (2) 理事・監事・会員・事務局を置いてNPO法人の運営を行い、保育受託運営・臨時保育の実施・育児要員の派遣・保育に関する相談や調査をはじめとする、多様な人材活用推進に係る支援業務を行う。

(資料：NPO法人の組織と業務)

3. その他

- (1) 当面の課題である男女共同参画の支援活動を日常的に行う「男女共同参画支援室（仮称）」の設置については、委員会において、さらに具体的な業務内容および適切な人員配置などの検討を継続する。
- (2) 数値目標の設定等については、委員会において検討を継続する。必要があれば、総合計画室のもとに調査のためのWG等を設置する。

以 上



新たな教員組織の在り方についての検討

「教員組織等の在り方に関するワーキング」における検討のまとめの方向としては、次のように進められています。

1 教員の職について

- 本学の教員の職は、教授、准教授、講師、助教、助手とする。

(注1) 講師は、部局の必要に応じて置くことができる職として残す。

(注2) 助手は、平成19年4月以降、新規に採用しないこととする。

なお、現在在職中の助手のうち、教育研究の補助を主たる職務としている者（いわゆる事務助手や技術職員の業務などを本務としている者）については、引き続き助手として残るケースがあるので、それらの者が在職する間は、助手の職を残すこととする。

(注3) 助手は新規に採用しないこととするに伴い、真に教育研究補助職員が必要な場合は、教室系技術職員と同じカテゴリーの職で採用することができるようにする。

2 現在の職から新職への移行について

- (1) 助教授は、すべて准教授に移行させる。

- (2) 助手は、部局の判断により助教と助手に振り分ける。

なお、振り分けに際しては、現在の職務の実態等を確認するとともに、改正学校教育法の助教及び助手の職務内容を勘案し、専攻や部門等で取り扱いが異ならないよう、部局長及び教授会が責任を持って部局として対応すること。

- (3) 新職に移行する任期付き教員の任期は、現在までの在職期間を通算するものとする。

3 助教及び助手の給与体系について

- 総人件費への影響（国と異なる運用をする場合、退職手当の財源が一部確保できないことがあるなど）を考慮すれば、現在の助手の給与体系（教育職基本給表（一）2級）を維持せざるを得ない。

ただし、助教については、以下の措置を講じることが適当である。

- ① 現在、一定の条件を満たした助手に対して支給している基本給の調整額についてはその支給条件を撤廃し、加給金として基本給表に定め、助教全員に支給すること。

- ② その期ごとに検討する賞与の役職段階別加算は、加算条件を撤廃すること。

なお、授業を担当する助教に対するインセンティブの付与については、各部局により事情が異なることが考えられるため、単に授業担当の有無のみをもって付与するのではなく、教育・研究・社会貢献に対する評価に基づき、従来からの業績手当の成績率又は昇給等で反映させる方が望ましいことから、授業を担当することによる新たなインセンティブを付与することはしない。

4 助教、助手、教務職員及び技術職員との間のポストの流用について

- 各職に欠員が生じた場合のポストの流用は可能とする。

なお、教務職員については平成17年4月から新規採用しないことになっており、また、助手についても平成19年4月からは新規採用しないことに留意すること。

5 准教授の論文主査の扱いについて

- 准教授を論文主査にすることは可能であり、部局の判断に任せることとする。なお、部局において適切な基準等を設けておく必要はある。

6 講座、学科目等の教員組織について

- 講座・学科目制については、硬直的・閉鎖的に陥らないよう必要な工夫や配慮を行った上で、大学設置基準改正後も引き続きこの組織形態を採ることが可能となっている。

なお、別の形態の教員組織への変更が望ましいとする部局がある場合は、その変更計画案について事前の相談、協議を受けて総合計画室でその適否について検討することとする。

教育・情報室

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択状況

平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」において、「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」（事業推進責任者・永井利三郎教授、医学系研究科保健学専攻）が採択されました。

KOAN始動

新しく導入しました学務情報システム KOAN（Knowledge of Osaka University Academic Nucleus）がいよいよ始動し、この新システムにもとづく Web 履修申請が、平成18年度後期の専門教育科目より開始されました。情報基盤デザイン機構では、来年度から始まる全学共通教育の Web 履修申請に向けて、なお一層の精緻なシステム管理に取り組んでいくことにしております。

カルト系団体の学生勧誘

全国の大学でカルト系団体が偽装サークルを結成して学生を加入する動きが浸透してきています。本学ではその浸透度はとくに高く、それへの対策として10月に、全学の1年生全員を対象とした緊急の特別講義「大学生活環境論」（必修）を開講し、「キャンパスにおけるカルト問題」について講義と注意喚起をおこないました。

学生指導をめぐる

去る10月5日、6日に全国国立大学学生指導担当副学長協議会（当番校・大阪大学）があり、次の議題について、かなり突っ込んだ議論をし、各大学より学生指導の取り組みについて多くの有益な情報を得ました。各大学とも学生生活をめぐって同じような問題を抱え、それへの取り組みにそれぞれ工夫をこらしており、これらの取り組みについては学生生活委員会、教育課程委員会を通じて各部局にお伝えしていきたいと考えております。

- ・ 学生が休学・退学する理由は様々であるが、特に修学意欲を無くして休学・退学する学生に対する有効な支援策について
- ・ 成績表の保証人への送付について
- ・ 大学での生活指導やモラルの教育について
- ・ カルト系団体対策について
- ・ 学生の学業・生活・メンタル・ハラスメント等に関する相談窓口と相談体制について
- ・ キャリア教育の取り組みについて
- ・ TA 制度について

研究推進室

研究活動における不正行為の防止及び対処

近年、研究活動における不正行為が多発している現状に鑑み、その対応について、研究倫理検討WGを設置し検討してきましたが、このたび同WGからの答申を受け、研究推進室会議での審議を経て9月20日の教育研究評議会において、大阪大学研究公正に関する遵守要綱及び大阪大学研究公正委員会等に関する規程が制定され、10月1日から施行されました。

その概要は、下記のとおりです。

【規程等の名称及び概要】

名 称	概 要
大阪大学研究公正に関する遵守要綱	公正な研究の確保に関し全学的に共通する基本的な指針を示す (趣旨・研究活動における不正行為・研究活動における遵守事項・研究活動における不正行為に対する対応)
大阪大学研究公正委員会等に関する規程	研究活動における不正行為の防止及び不正行為に起因する問題に対処する委員会の設置等に関して必要な事項を定める (本規程における不正行為の定義：ねつ造・改ざん・盗用)

【大阪大学研究公正委員会及び部局が実施する主な事項】

実 施 機 関	事 項
大阪大学研究公正委員会	・事務局における窓口の設置（責任者：研究推進・国際部長） ・調査の開始、不開始にかかる申立者への通知 ・調査が必要と認めた場合の部局の長への予備調査及び適切な対応の指示 ・本調査の実施 ・本調査実施決定時の競争的資金配分機関への通知 ・審査、裁定 ・調査報告書の作成 ・調査報告書の申立者、対象研究者への開示 ・裁定内容の総長及び部局の長への報告 ・啓発活動
部 局	・部局における窓口の設置（責任者：部局において定める） ・申立てがあった場合の委員会委員長への報告 ・予備調査の実施 ・予備調査結果報告書の作成 ・予備調査結果の委員会委員長への報告並びに申立者及び対象研究者への通知 ・部局における啓発活動

グローバルCOEプログラムに関する意見交換会

研究推進室では、平成19年度から実施されるグローバルCOEプログラムに対し、公募があれば直ちに対応できる体制を整えるため、9月14日(木)に平成14年度採択の21世紀COEプログラム拠点リーダーと意見交換会を行い今後の方策を検討しました。

評価・広報室

17年度に係る業務の実績に関する評価結果の公表

各国立大学法人の平成17年度の年度評価結果が国立大学法人評価委員会から公表されました。

大阪大学の評価結果については、本学が教育研究の質の向上と業務運営の改善に積極的に取り組んだ種々の実績が十分に評価され、特に「業務運営の改善・効率化」の進捗状況は、「中期目標・中期計画の達成に向けて特筆すべき進捗状況にある」と高く評価されました。また、「財務内容の改善」、「自己点検・評価及び情報提供」、「その他の業務運営に関する重要事項」の進捗状況も「中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる」との評価を受けました。全体的に中期目標・中期計画の達成に向け順調に進んでいると国立大学法人評価委員会から評価されたことになります。

各部局におかれましては、業務実績報告の作成にご協力いただき大変ありがとうございました。

同評価結果については、ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

(大学HPアドレス [http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka\(h17\).pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka(h17).pdf))

【評価結果抜粋】

1 全体評価

大阪大学は、大規模大学としての課題を抱えつつ、堅実な取組を積み重ね、成果を上げている。特に、大阪外国語大学との統合に向けた合意形成がなされたことは、特筆すべき成果であると評価できる。

また、個人評価については、部局ごとに評価基準を設けピアレビューによって、平成17年度は8部局が実施している。それを受け、全学評価委員会で部局の評価の正当性を判断し、情報を開示している。さらには、組織評価はロードマップに基づき、段階を追っての実施であるが、今後、評価方法の確立を目指した着実な検討が期待される。なお、教員に対する業績評価の処遇への反映については、部局での評価結果をもとに業績手当に反映しており評価できるが、今後どのように展開するのが注目される。

このほか、業務運営については、人件費の一部(年6,000万円)を教員の業績手当に加算し、業績手当の成績優秀分の区分を拡大するなど、インセンティブ効果の拡大を図っている。

また、教員人件費の10%を学内留保分として確保することにより、教員の重点配置を実施し、将来の人件費削減に備えている。

自己点検・評価については、各部局等から報告のあった平成16年度の達成状況評価を基に、評価・広報室員が検証、達成状況評価書を作成し、各部局へフィードバックしており、独自の手法であると評価できる。

教育研究の質の向上については、大学共通教育賞による顕彰、教養教育奨学金制度の創設、課外活動奨励費による学生の自主学習への支援等、独自の特色ある取組が積極的に行われている。

2 項目別評価

項 目	評 定
(1) 業務運営の改善及び効率化	5
(2) 財務内容の改善	4
(3) 自己点検・評価及び情報提供	4
(4) その他業務運営に関する重要事項	4

5：特筆すべき進捗状況にある

4：順調に進んでいる

3：おおむね順調に進んでいる

2：やや遅れている

1：重大な改善事項がある

達成状況評価の実施

9月～11月にかけて、部局に対する達成状況評価を実施します。達成状況評価は、4月に提出された部局達成状況評価シートを用いて、評価・広報室において達成状況評価書を作成することにより行います。

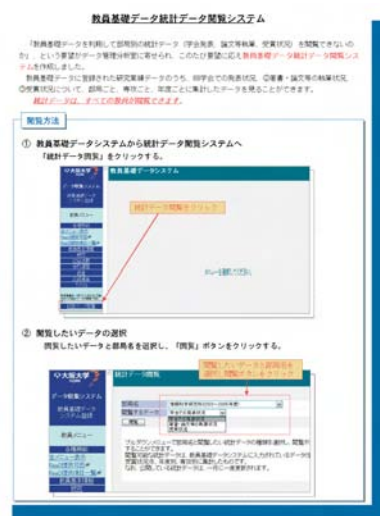
コメントは、教育、研究、その他の下に設けた小項目ごとに、平成17年度実績で特に努力が見られる点や根拠データの整備状況、平成17年度実績と平成18年度計画との整合性、中期計画の達成に向けての観点から行います。

11月下旬には、評価結果を送付する予定ですので、各部局におかれましては、平成18年度の計画の推進及び平成19年度計画の策定に活用いただくようお願いします。

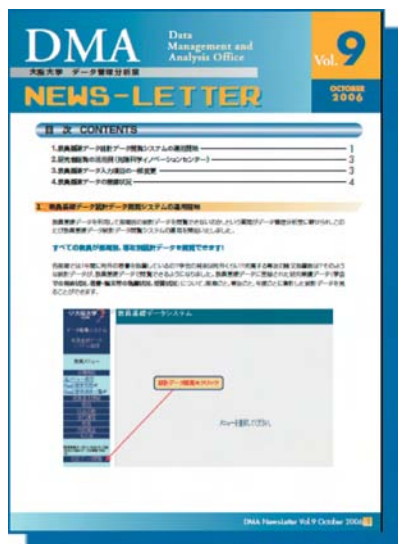
教員基礎データ統計データ閲覧システムの運用開始

「教員基礎データを利用して部局別の統計データ（学会発表、論文等執筆、受賞状況）を閲覧できるように」、という要望がデータ管理分析室に寄せられ、教員基礎データ統計データ閲覧システムを作成しました。

教員基礎データに登録された研究業績データのうち、①学会での発表状況、②著書・論文等の執筆状況、③受賞状況について、部局ごと、専攻ごと、年度ごとに集計したデータをすべての教員が閲覧できます。



DMA NEWS-LETTER VOL.9の発行



DMA NEWS-LETTER Vol.9を発行しました。

Vol.9では、①教員基礎データ統計データ閲覧システムの運用開始、②研究者総覧の活用例、③教員基礎データの入力項目の一部変更、④教員基礎データ更新状況を掲載しています。

詳しくは、学内専用ホームページ「教員基礎データ関係」をご覧ください。

阪大ニューズレター No.33の発行

阪大ニューズレター No.33を発行しました。

No.33では、「大学と社会との連携・協力」をテーマに取り上げ、紹介しています。

No.34（12月発行予定）では、在学生の保護者の方々にも送付するため、「教育」をテーマにとりあげ、紹介します。



財務・会計室

平成17事業年度財務諸表

平成17事業年度に係る財務諸表については6月に文部科学省へ提出していましたが、このたび、9月1日付けで文部科学大臣による承認が行われました。

承認された財務諸表については大阪大学のホームページに掲載しています。

([http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/zaimu\(h17\).html](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/zaimu(h17).html))

なお、決算における剰余金については、今後、利益の処分に関する書類（案）により財務大臣協議が行われ、協議が整い次第文部科学大臣による承認が行われる予定です。

平成19年度の予算配分

財務・会計室では平成19年度の予算配分についての検討を始めており、現在は間接経費及び重点経費の在り方や、非常勤講師経費、ティーチングアシスタント経費等の配分について検討を行っています。

また、平成19年度には大阪外国語大学との統合も予定され、新たな予算配分ルールが必要となることから、今後、統合後も見据えた平成19年度予算配分方針の策定に向けてさらに検討を進める予定です。

人事労務室

民間企業等からの在籍出向者の受け入れ

外部資金を活用して、民間企業等の優秀な研究者が民間企業等に在籍したまま、本学の教育・研究に従事できるよう、教職員（常勤教員及び非常勤職員の定時教育研究等職員）に雇用する制度を平成18年7月24日に創設しました。今回、更にこの制度を活用すべく、運営費交付金（大学留保人件費又は特定のプロジェクトとして認められた経費（現在は特別教育研究経費のみ））についても、活用できるようにしました。

【平成18年9月25日施行】

改正高年齢者雇用安定法への対応

改正高年齢者雇用安定法により、段階的に65歳までの雇用機会の提供することが義務化され、その方法として、継続雇用制度の導入（再雇用制度）する案を示しました。（学内専用ホームページに掲載）

また、同案に対する具体的な内容として、関係規程（案）を作成しました。（学内専用ホームページに掲載）

なお、これに併せて、任期付職員（非常勤職員を含む。）についても、関係規程（案）を作成しました。（学内専用ホームページに掲載）

今後、学内手続きを経て、正式に決定される予定です。

【平成18年10月中目途】

事務系職員の評価制度

本学では、事務系職員の人的資源を最大限活用していく必要から新たな評価制度を検討し、その考え方を示しました。（学内専用ホームページに掲載）

なお、この新たな評価制度を行うためには、今まで以上に客観性及び公平性を高める必要から、評価者への研修が不可欠と考え、10月に実施する予定です。

【平成18年11月1日実施予定】

平成18年人事院勧告

去る8月8日に人事院勧告が行われ、今後これに基づき給与法の改正案が国会において審議される予定です。大学としても、勧告について種々検討してまいりましたが、国立大学法人法第35条で準拠される独立行政法人通則法第63条第3項では、「法人職員の給与及び退職手当の支給の基準は、社会一般の情勢に適合したものとなるように定めなければならない。」とされていることなどから、本年も人事院勧告に依拠した形で、就業規則の改正等を実施することを検討しております。（学内専用ホームページに掲載）

国際交流推進本部

国際交流に関する情報交換会

国際交流推進本部では、この6月から9月にかけて、本部員である辻毅一郎総長補佐および石川真由美特任助教授（国際企画室）が12部局を訪問し、国際交流に関する情報交換会を行なってきました。これまでに、文学研究科、理学研究科、産業科学研究所、薬学研究科、微生物病研究所、基礎工学研究科、法学研究科、高等司法研究科、言語文化研究科、情報科学研究科、医学系研究科、工学研究科で実施してきました。部局からは部局長、国際交流委員、あるいは積極的に国際交流活動に携わっている教職員の参加がありました。参加人数は、多くの部局で各5～8名程度でしたが、35名参加した部局もありました。

この情報交換会は、これまで個人や部局に依存していた国際交流活動を、全学的立場から組織的に推進するため、部局における国際交流担当者と意見を交わそうとするものです。この情報交換会の前半では、辻毅一郎総長補佐から、昨年度国際企画室が行なった調査内容に基づき、本学や国内外の大学の国際交流の現状、国際交流推進本部が策定した国際戦略及び重点的活動に関する説明を行い、後半では、参加者相互の意見交換を行いました。

情報交換会の最も大きな収穫は、これまで本部で把握できていなかった各部局での国際交流活動についての情報が得られたことです。今後、このような部局における取り組みを大学として推進し、発信していくことの必要性が明らかになりました。部局からの要望としては、外国人学生・研究者受け入れの際の各部局教員の負担を軽減するため、宿舍斡旋の一元化などのワンストップ・サービス実現への期待が多く聞かれました。また、海外拠点の具体的役割、活動内容を、もっと明確にすべきであるという声も聞かれました。この情報交換会で得られた情報、意見、要望は、今後の大阪大学全体の国際交流を推進していく上で、大いに示唆に富むものでした。現在、この情報交換会に関する報告書を作成中です。

グローニンゲン大学との学術交流

昨年、大阪大学はオランダのグローニンゲン大学に教育研究センターを開設し、10月に開所式と、それに続いて両大学の Collaboration Symposium を開きました。この開所式・Symposium には宮原秀夫総長をはじめ50名余りの阪大教職員が参加し、同大学との交流を深めました。

今回、10月2、3の両日、グローニンゲン大学から、Kuipers 総長、Zwarts 理事を始め、法学部長・医学部長を含む約20名から成る一行を迎えました。2日午後には、大阪大学中之島センターで「大阪・グローニンゲン：日蘭交流の将来」と題するパネル会議、3日午後には吹田地区コンベンションセンターで研究交流の実績や今後の研究交流の方向をめぐる発表・討論会が開かれました。そのほか、部局ごとに、両大学の関係研究者が集まり、具体的な研究交流推進の意見交換を行いました。また、豊中キャンパスで、阪大在学学生を対象としてグローニンゲン大学への交換留学・研究留学の説明会が開かれました。これには約80名の学生が参加し、一般説明会の後では、多くの学生が同大学の先生に、きわめて熱心に、個別の相談を行っていました。これらの諸会議を通じて、グローニンゲン大学の国際展開への強い意気込みを感じました。次号に詳しい報告をしたいと考えています。



パネリストに多くの質問が出ました



グローニンゲン大学の説明を熱心に聞く学生

平成18年度「就職担当教員・学生生活委員会懇談会」開催

平成18年度「就職担当教員・学生生活委員会懇談会」が、7月26日(水)午後1時30分からコンベンションセンターで開催されました。

学生にとっての最大の関心事は、卒業（修了）後の就職であり、法人化後は、大学の評価もその就職状況が大きな要素となっています。

この懇談会は、組織的な就職支援の強化の一環として、各部局の就職担当教員及び学生生活委員会委員を対象に就職指導に対する意識の高揚を図ることを目的に、企業就職媒体社等の講師を迎え企画されたものであり、今回は第3回目で各学部から24名の教員の参加がありました。

当日は、鷺田清一教育・情報室長（副学長）による挨拶に始まり、株式会社リンクアンドモチベーション東京支社 榊原清孝取締役による講演「就職活動生のモチベーション・マネジメントー意欲の低い学生の就職意欲を高めるためにー」の後、佐野邦雄学生部キャリア支援室長からの資料による「大阪大学における就職支援の現状」の説明、川村好



英就職相談員による報告「本学の就職相談の実態報告について」が行われました。

講演等の終了後は、「本学の就職支援」などについて、活発な意見交換・情報交換の場となり、懇談会は盛況のうちに終了しました。

（学生部キャリア支援室）

成果有体物規程改正案説明会開催

大阪大学知的財産本部では、7月28日(金)、「成果有体物規程改正案等に関する説明会」を開催しました。今回の規程改正は、成果有体物の学術・産業利用の促進とトラブ



小此木特任教授

ル回避を目的とするもので、この説明会は、成果有体物移転（MTA）により生じる可能性のある知的財産権侵害への対応、MTAの際の権限・責任の所在の明確化等を盛り込んだ規程改正案について、学内周知および意見聴取のために行われました。

はじめに、知的財産本部の藤澤幸夫特任教授から、学内ワーキングの検討経過の報告があり、続いて小此木研二特任教授から、規程改正案、他機関へ移転する場合の手続き、成果有体物の所有権の所在等について説明が行われました。

出席者からは、手続きの時期、他大学の教員が創作に関与した場合の取り扱い等、具体的な質問が相次ぎ、MTAへの関心の高さがうかがえる説明会となりました。

今後は、出席者からの意見を踏まえ、今秋に規程改正を予定しています。

（知的財産本部）

産業科学研究所で「ものづくり教室」開催

産業科学研究所技術室では、8月2日(水)から4日(金)まで、「ものづくり教室」を開催しました。

近年、子供達の理工離れが問題となっております。資源の少ない日本では、高度成長期、世界でも屈指のものづくりの「技術」で発展してきました。今日の科学の発展があるのも、ものづくり技術の裏付けがあったからと言っても過言ではありません。その技術も今や生産の拠点が東南アジアの諸国に移行していったことに伴ってだんだんと廃れつつあります。一度廃れた技術を回復するためには、計り知れない年月が必要とされます。このような現状を踏まえ、小中学生の時からものづくりに興味を持ち、体験をしてもらう事により将来の人材育成に少なからず貢献できればと考え、企画されたものです。

「金属加工」、「ガラス工作」、「電子回路」の3コースを設定し、3日間に66名の小中学生に「ものづくり」の難しさ、楽しさ、完成した時の喜びを体験していただくと共に、各日とも、コース別の工作作業に入る前に全員で「環境調和と鉛フリー」あるいは「産研の研究紹介」と題した講義



工作作業風景（やすりがけ）

を受け、社会勉強もしていただきました。

定員を大幅に超える200名余りの応募があり、大きな反響がありました。また、参加者は全員が「楽しかった」、「また参加したい」という感想で、有意義な取り組みとなりました。

(産業科学研究所)

公開講座「教員のためのリフレッシュ講座」開催

本公開講座（場所：大阪大学中之島センター、日時：8月6日(日)－8日(火)、定員50名、講師：大学院言語文化研究科言語文化教育論講座教授陣ほか）は5年目を迎えますが、多岐で充実した内容の講義となったこともあり、中・高のほか小・大学の教員、院生、さらに翻訳者など、英語教育に関心を持つ多くの方（58名）が滋賀、和歌山を含む近畿圏だけではなく北海道、福岡、岐阜、愛知、愛媛からも参加がありました。

アンケートにおいても、「講師の先生方のレベルが非常に高く、内容の濃い講座だった」「日頃授業をしていて、行き詰っていた点が解消した」「大学の先生方も、ご自分の研究に加えて、学生の教育に多大の労力を払っておられるのに感動した」「英語を言語という大きな枠の中で教え



全体討論の風景

ていただき、ことばの大切さが分かりました」「生徒に対して、文法・発音の基礎知識を今後一層指導する必要を教わり、授業に生

かしたい」などの意見が寄せられました。現場で直面している問題への考え方や対策のほか、IT時代の授業の魅力的な展開の仕方、生徒の理解を深め感動を与える文法や講読の授業のあり方など、学術的な知見を踏まえながら直ぐに应用できる講義内容を提供したことが特に高く評価されたようです。

〈講義内容〉

「英文法研究の英文法指導への応用」 (岡田伸夫教授)

「新時代の英語カリキュラムと現代技術」 (成田 一教授)

「発音の科学：ダイナミックメカニズムと訓練」

(成田 一教授)

「アリスのことば学：「読み」への応用と実践」

(沖田知子教授)

「ネット時代における国際英語の統合的実践」

(日野信行助教授)

「バイリンガリズムと外国語教育」

(山本雅代関西学院大教授)

「オーラルコミュニケーション実践授業(1)&(2)」

(ジェリー・ヨコタ教授)

アンドリュー・村上スミス助教授)

全体討論「小学校英語の問題と連携」

(大学院言語文化研究科)

デ・ラ・サール大学（フィリピン）との大学間学術交流協定を締結

8月9日(水)フィリピンのデ・ラ・サール大学―マニラ(De La Salle University <http://www.dlsu.edu.ph/>)において、本学とデ・ラ・サール大学との大学間学術交流協定を締結しました。調印式には、本学より橋本日出男理事、小谷眞一大学院理学研究科長をはじめ、笠井俊夫大学院理学研究科教授、赤井久純大学院理学研究科教授、笠井秀明大学院工学研究科教授が出席し、デ・ラ・サール大学からは Br.Armin



大学間学術交流協定調印式

(前列左から Dr.Quebengco 副学長、Br.Armin Luistro, FSC 学長、橋本理事、後列左から笠井(秀)教授、小谷理学研究科長、赤井教授、笠井(俊)教授、Dr.Janairo 理学研究科長)

Luistro, FSC 学長、Dr. Quebengco 副学長、Dr. Janairo 理学研究科長が出席しました。

フィリピンのデ・ラ・サール大学は、東南アジアにおける最も優れた大学の一つとして評価されており、本学では13年前から研究交流活動及び留学生の受け入れを継続して行い、着実に交流の基礎を築いてきました。このたびの大学間学術交流協定の締結を契機に、更なる交流が期待されます。

この度の調印式と併せ“7th DLSU-OU Science Research Workshop”を開催いたしました。このワークショップでは、調印式参加の本学教員に加えて、東京大学・福谷克之教授が招待講演を、草部浩一大学院基礎工学研究科助教授、Wilson Agerico Dino ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構特任助教授が基調講演を行い、デ・ラ・サール大学の学生たちが熱心に聴講しました。又、本学の学生たちもワークショップに参加し、活発な意見交換、情報交換を行いました。

両大学から多数ご参加いただき、盛会のうちに終了しました。

(研究推進・国際部国際交流課)

社会経済研究所第3回行動経済学研究センターシンポジウム開催

「経済学は実験できるか」をテーマに、社会経済研究所第3回行動経済学研究センターシンポジウムが中之島センター佐治敏三メモリアルホールにおいて、8月23日(水)に開催されました。

本シンポジウムは、平成16年度に新しい学問分野である行動経済学の現実経済への有用性や魅力を一般に紹介することを目的として始められ、「人々の心理と経済行動」「脳科学と経済学の対話」といったテーマで、毎年数多くの方々に参加いただけてきました。今回も、社会人、研究者、学生など120名を超える多数の参加がありました。

第3回目となる今回は、株式市場のバブルを実験室で発生させたり、協力行動や、いじわる行動などの特性を実験によって明らかにするといった、これまでの経済学には馴染みのうすかった「実験」を用いた研究について紹介しました。

シンポジウムは、実験経済学の代表的研究者4名(公立はこだて未来大学川越敏司助教授、早稲田大学商学部広田真一助教授、本研究所から西條辰義教授、筒井義郎教授)

をパネリストに、本研究所副所長大竹文雄教授の司会で進められました。シンポジウムの前半では、「だますあなたが悪いのか？

だまされるわたしが悪いのか？」(川越)、「株式市場は実験できるか？」(広田)、「日本人はいじわるがお好き？」(西條)、「経済実験とアンケート」(筒井)というテーマで講演が行われました。後半では、一般参加者からも多くの質問が出されて活発な質疑応答が行われ、行動経済学に対する関心の高さを示すシンポジウムとなりました。

(社会経済研究所)



平成18年度大学説明会（オープンキャンパス）に10,883人が参加

8月16日(水)から23日(水)の間、学部別に日程を分けて大学説明会（オープンキャンパス）が開催されました。例年文科系4学部、理科系3学部及び医歯薬系3学部のグループに分けて、同一グループ内で日程が重ならないよう調整し、参加希望者が複数の学部を見学できるように工夫されています。参加者数は年々増加傾向にあり、今年度は10,883人の参加がありました。（前年比1,462人増）

各学部では、学部・学科の内容紹介、入試概要の説明、大学及び学部紹介DVDの上映、研究室見学・模擬授業及び個別相談コーナーなど多彩な内容で実施し、参加者には大変好評でした。

（学生部入試課）



岡山県美作市・大学院工学研究科連携協定記念講演会&パネルディスカッション開催

大学院工学研究科と岡山県美作市は、4月に締結した連携協力協定を記念して、8月25日(金)に講演会を実施しました。豊田政男大学院工学研究科長による講演「知への誘い～21世紀の持続型社会を担う皆様へ～」と「21世紀の社会が求める人材」をテーマとしたパネルディスカッションを実施し、会場では21世紀を支える人材像、大学と市の連携のあり方など幅広いテーマについて活発な議論が行われました。工学研究科との連携に対する美作市民の関



巨瀬小学校で記念撮影を行う出席者

心は高く、講演会には宮本俊朗美作市長をはじめとして役所関係者、市民合わせて約70名の参加がありました。工学研究科からは本協定の窓口となった小林昭雄教授をはじめ、谷口研二教育研究評議員及び数名の教職員が参加しました。

翌日、工学研究科・美作市の連携の拠点となる巨瀬（こせ）小学校を視察し、その後、工学研究科関係者、美作市役所関係者、連携協力の窓口となる地元NPOの代表者による会議を開催しました。会議では連携事業の具体的な方向性を議論し、美作市側からは美作市の長期ビジョンのグランドデザイン策定の支援や、人的交流による人材育成への要望が出され、工学研究科からは共同研究や学生・教員の派遣を通じて要望に応える構想が提案されました。美作市側からは「4月の協定締結の際には、この協定により何ができるのか不安も抱いていたが、実際に交流することにより、協定締結による将来的な連携の拡がり確信することができた」との言葉が聞かれ、今後、美作の特徴を生かした連携事業を展開するための協議を継続することをお互いに確認し、和やかなうちに閉会しました。

（大学院工学研究科・工学部）

歯学部附属病院が「サイエンス・フェスタ 第15回記念大会」に参加

8月26日(土)、27日(日)の両日、大阪の西梅田にあるハービスホールにおいて、青少年のための科学の祭典大阪大会「サイエンス・フェスタ 第15回記念大会」が開催され約3万人にのぼる小中学生ならびにその父兄が参加されました。この催しに、その実行委員長である高橋憲明先生(大阪市立科学館館長)のご厚意により歯学部附属病院口腔総合診療部も参加させていただき、「口や歯の力のコントロール」と題して、「かみ合わせの力を測ってみよう」ということで咬合力を測定し、その発現メカニズムについて説明しました。子供たちの素直かつ、的を射た質問に驚かされる場面もありましたが、いろいろ考えさせられる充実の2日間でした。

この催しは、子供たちの「理科ばなれ」をふせようと「自分でやって確かめる」ことで科学に興味を持ってもらうことを目的として、小学校、中学校、高等学校さらに大学の先生たちがボランティアとして運営されてきています。日本の将来を支える子供たちが科学の面白さに気づいてもら



うためにも、今後本学の多くの先生が積極的に参画されることをお願いしたいと思います。

(歯学部附属病院)

大学院理学研究科物理学専攻東京入試実施

大学院理学研究科物理学専攻では、昨年度に引き続き平成19年度の大学院前期(修士)課程の入試を8月28日(月)に東京のキャンパス・イノベーションセンターで実施しました。これは同じ日に大阪大学豊中キャンパスで行われた、物理学専攻と宇宙地球科学専攻の合同の大学院入試と同時進行という形での試験でした。

高い学問的能力と強い知的好奇心をもった大学院生を、



より広い範囲から集めることは、大阪大学における物理学研究をますます発展させるのに必須のことです。そのためには大学院受験生に対して、受験しやすい環境を作ることが重要と考え、昨年度初めての試みとして、豊中キャンパスのみならず東京にも試験会場を設定し、受験生の便宜をはかりました。その結果一定の成果を上げることができたことを評価し、関東地方の優秀な物理学徒を大阪の地に集めることを目的に、今年度も学生の人口密度の高い東京に試験会場を設定し、実施しました。

受験生には28日の筆記試験の後にアンケートを行い、東京で入試を行うことの価値を尋ねました。結果は概ね好評で、大阪までの交通費が節約できることを歓迎していました。

来年度に向けての努力目標としては、この大学院の東京入試というものを、より広く物理の学生に知ってもらうことが何よりのことです。そのための広報活動に一層の工夫が必要だろうと思います。

(大学院理学研究科・理学部)

平成18年度（第28回）基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」開催

基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」が、8月28日(月)～31日(木)の4日間にわたり、基礎工学部国際棟（シグマホール）において開催されました。

今年で28回を数える本講座は、基礎工学部からの情報発信の一環として1979年から毎年開催されており、地域社会と大学との連携を深めるための重要な役割を担っています。

今回は、基礎工学研究科、情報科学研究科、生命機能研究科及び極限量子科学研究センターの教員9名が、画像や



講義の様子



研究室見学の様子

動画を駆使し、自らの研究成果や科学技術について分かりやすく講義を行いました。また、講義終了後に実施した研究室見学も大変好評でした。

中学生から80代以上の方まで、125名の参加者が熱心に講義に取り組み、4日間の公開講座は盛況のうちに終了しました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

第15回理学研究科技術職員「学外研修」開催

理学研究科技術部では昨年に続き9月5日(火)理学研究科18名の技術職員全員参加で学外研修を、大阪市立大学で実施しました。

大阪市立大学・大学運営本部・研究支援課の協力により、午前中は全員で同大学基礎教育実験棟、工作技術センター、理学部分析室を見学、さらに専門分野毎の三グループに別れ、それぞれの施設を重点的に見学を行いました。午後からは同大学技術職員全体研修と合同で、大阪市立大学教員による講義、技術職員先輩による技術報告、両大学技術職員による安全管理の取組み事例紹介を行い、その後専門分野に分かれて技術情報交換・技術職員交流を行いました。

懇親会でも技術交流の話題は尽きず、大変有意義な研修会でした。

(大学院理学研究科・理学部)



教職員懇親会開催

毎夏の恒例行事である教職員懇親会が、9月7日(木)にアサヒビール株式会社吹田工場ゲストハウスで開催されました。生憎の雨模様にもかかわらず、本学から宮原秀夫総長、鷺田清一理事・副学長、二瓶文博監事、熊谷信昭元総長の他、各部局長、退職事務職員及び教職員が、また、アサヒビール株式会社からは福地茂雄相談役をはじめ関係者が出席しました。

当日は、福地相談役、宮原総長の挨拶に続き、熊谷元総長が懇親会の乾杯を行いました。

懇親会では、抽選会が催されるなど、終始和やかな雰囲気の中、出席者が互いの旧交を温め合い、盛会裡に終了しました。

(総務部総務課)



工場見学風景

平成18年度大阪大学係長研修実施

平成18年度大阪大学係長研修が、9月11日(月)から13日(水)までコンベンションセンターを会場として行われました。

本研修は、係長及び係長相当の職にある者に対し、その職務遂行に必要な基本的・一般的知識を修得させるとともに、監督者としての能力及び識見を確立させ、大学行政の管理運営の重要な担い手としての職員の資質の向上を図ることを目的とし、本年度は他機関への出向者(10機関19名)を含む42名が受講しました。

また、昨年度に引き続き、講義・演習を外部委託とし、(株)マネジメントサービスセンター小林広巳氏を研修講師に迎え、実施されました。

研修は「環境変化とマネジメント」、「コミュニケーション・ゲーム」、「効果的な業務遂行とリスク管理」、「DiSCによる自己理解」、「DiSCを活用した対人対応の強化」といったカリキュラムで進められ、講義、班別討議などを通じて、活発な意見交換が行われるなど、全員が意欲的に取り組む姿勢がうかがえました。

中でも「DiSC」という世界的に有名な自己分析ツールを使用した実習では、客観的に自分自身を見つめ直す良い



機会となり、自らの新たな一面を発見した受講生も見受けられました。

研修最終日には、自己啓発計画書として、各人が、現在の自分の分析、将来のなりたい自分、それを実現するための計画を作成しました。

今回の研修で、受講生は様々な意見交換を通じて理解を深め合い、厳しい中にも和やかな雰囲気の中で3日間の日程を終え、全員所定の課程を修了しました。

(総務部人事課)

「アカデミック・ライティング・セミナー：～アクセプトされる論文の書き方～」開催

人間科学研究科では、魅力ある大学院教育イニシアティブ（大学院 GP）プログラムの一環として、『アカデミック・ライティング・セミナー：～アクセプトされる論文の書き方～』を本研究科ユメヌホールで9月12日（火）～14日（木）の3日間にわたり開催されました。

講師には、シンガポール大学の Paul Kratoska 博士及び Sheffield 大学の上級司書 Gill Goddard 氏を迎え、本研究科国際交流室の Beverley Anne Yamamoto 講師と共に、国際的な学術論文雑誌への投稿に必要な英語論文作成の技法について学びました。

セミナーは講義とワークショップから構成され、Abstract の書き方、文献検索・資料整理の方法及び査読システムの



Paul Kratoska 博士

理解等についての具体的な講義指導、並びに研究課題の取り上げ方や論点の整理の仕方など自分の考えを英語論文にしていく過程についての参加型のトレーニングを行うなど非常に盛りだくさんの内容となりました。また、希望者は投稿予定の論文を事前に提出し、講師から添削とアドバイスを受けることができました。

文系・理系等の研究分野の別により、研究方法や論文作成の方法に違いはありますが、いわゆる論文作成にあたっての“作法”が、研究内容と同様に投稿論文掲載の過程には重要であることが認識されています。如何に優れた研究であっても、論文という表現形態が読者や査読者とのコミュニケーションの中に成り立つものである以上、必要とされる作法を学ぶことは、研究者として重要なトレーニングの一環であると考えられます。

今回のセミナーでは3日間で延べ150人近い参加者があり、こうしたセミナーへの需要の高さを再確認することとなりました。特に本研究科は、文・理系の両分野を科内に持つため、研究分野の垣根を越えて必要とされるアカデミック・ライティングの技術力向上の必要性に応える方法を提案したものとしても、有意義なセミナーであったと考えられます。また、今後も同様の取り組みを行っていく可能性を含め、広い意味での国際的な発信力を向上させていくための方法について考えるよい機会となりました。

（大学院人間科学研究科・人間科学部）

平成18年度近畿地区国立大学法人等パソコンリーダー研修

平成18年度近畿地区国立大学法人等パソコンリーダー研修が、9月5日（火）から9月8日（金）と9月12日（火）から9月15日（金）の8日間にわたって大阪大学中之島センターで開催されました。

この研修は、自己の能力向上に資するだけでなく、研修受講後各部署において「習得した知識を各職場で他の職員にも広め、多くの職員の操作能力向上に貢献する」ことを目的として、「EXCEL 基礎」・「EXCEL 応用」・「POWER POINT 基礎」・「POWER POINT 活用」の講義・実習が行われ、約260名（うち阪大130名）が受講しました。

また、それぞれ分野の異なった職務に携わる者が参加しており、休憩時間には懇談等を通じてお互いに情報交換を行う姿が見受けられました。受講者からは、講義・実習内容だけでなく、講師の説明の仕方を参考に実際のプレゼン



テーションの方法も学ぶことができ、非常に有意義な研修であったとの感想が寄せられました。

（情報推進部情報企画課）

附属図書館 初のバイリンガルオリエンテーション

附属図書館本館では、毎年秋に英語でおこなっていた短期留学生へのオリエンテーションを今年は9月27日(水)に英語と日本語の二ヶ国語で同時に実施しました。これは、日本語に堪能な留学生が数多く、日本語での案内を望んでいたとの昨年の反省に基づき企画、立案したものです。留学生を英語班(30名)と日本語班(20名)の2班に分け、パワーポイントによる図書館説明約30分と館内のライブラリートゥアー約30分をそれぞれの言語でおこなわれました。会場と機器類の関係で日本語班はツアーを先に、英語班は説明を先にするスケジュールとなりました。世界各国から大阪大学に集まった留学生たちは、異国の初めて見る大規模図書館に大いに興味を持ち、図書館職員に次々と質問していました。

(附属図書館)



英語班ライブラリートゥアー

「武道教室～模擬日本刀を使った動き～」開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、9月27日(水)、28日(木)、29日(金)の3日間、豊中地区教職員および学生を対象とした「武道教室～模擬日本刀を使った動き～」(指導:坂東隆男・大学教育実践センター助教授)を、豊中地区第2体育館において開催しました。

本教室は、平成15年度から「剣道教室」として開催さ



れてきた講習会ですが、その中でも特に人気が高かった、模擬日本刀を使った動きに内容を絞り、実施したものです。今回は、約25名の教職員、大学院生、学生の方々が参加されました。

内容は、日本刀の取り扱い方、抜き方、鞘(さや)への納め方、構え方、素振り、そして、全日本剣道連盟居合(いあい)の動きを題材としました。今回は3日間の開催でしたが、参加者が都合のよい日に参加できるよう、原則的に毎日同じ内容を実施しました。参加者の方々は、静かで落ち着いた雰囲気の中で、姿勢、呼吸に気をつけながら、真剣に動きを練習していました。

危険のない安全な模擬日本刀を使用し、すばやい動きや筋力・持久力が必要としないため、年齢・性別・体力の有無に関係なく気軽に実施でき、参加者の方々には好評でした。平成18年度は、11月に吹田地区での開催も予定しています。

(大学教育実践センター)

大学院学位記授与式挙行

9月27日(水)コンベンションセンター MO ホールで、大学院学位記授与式が行われました。同授与式は、これまで7月、12月及び3月に行われていましたが、今年度から9月と3月の年2回に集約されました。

今回の修了者は162名(修士21名、課程博士92名及び論文博士49名)で、受領代表者15名が宮原秀夫総長から学位記が授与されました。列席した修了者は、総長式辞の中で「学位に、社会が期待するところは、皆さんの想像以上に大きいものがあると思います。」と激励を受けました。
(総務部総務課)



第22回湯川記念講演会開催

湯川記念室の定例行事として毎年開催している湯川記念講演会が、本年度も日本物理学会大阪支部との共催、日本物理教育学会近畿支部の協賛により、9月30日(土)大阪大学中之島センターにおいて開催され、幅広い年齢層の約100人が参加しました。

『加速器で探る素粒子・宇宙・物質・生命』と題し高エネルギー加速器研究機構 J-PARC センター長・永宮正治教授が、20世紀の物理学を大きく飛躍させた加速器にスポットを当て、未来の科学を開く新しい加速器施設について分かりやすく解説されました。次に、本学サイバーメディアセンター・菊池 誠教授が『物理学の目で世界を眺める』と題し、日常よく見られる高速道路上での交通渋滞発生を物理学の目で見るとどうなるかについて実験映像を披露されました。



どちらの講演も、聴衆からは熱心な質問が続出し、知的興味を呼び起こす有意義なものとなりました。

(湯川記念室)

セアカゴケグモに注意

10月中旬に、吹田キャンパスでセアカゴケグモ(写真参照)が発見され、現場周辺の駆除を行いました。セアカゴケグモは強い毒性を持っていますので、もし発見した場合は、安全衛生管理部に連絡するとともに、素手でさわらず、家庭用殺虫剤で駆除してください(卵のうについては、家庭用ガスバーナーによる焼却が必要です)。詳しくは、下記 URL を参照ください。

安全衛生管理部安全衛生管理課

TEL : 06 (6879) 4023

大阪府健康福祉部環境衛生課ホームページ

<http://www.pref.osaka.jp/kankyoeisei/sumai/2seaka/gokegumo.html>



セアカゴケグモメス・卵のう



セアカゴケグモオス

(安全衛生管理部)

第45回全国七大学総合体育大会得点表（最終結果）

		大学数	参加 校数	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学	
				順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点
アイスホッケー		7	6	1	10	3	6	4	0※1	5	4	6	3	7	2	2	8
スキー		7	5	不参加		不参加		2	8	4	4	3	6	1	10	5	3
航空		7	6	6	3	3	6	7	2	1	10	5	0※2	4	4	2	8
馬術		6	6	5	2	2	6	6	1	4	3	3	4	該当団体なし		1	8
柔道		7	7	7	1.5	1	10	2	8	3	5	7	1.5	5	3	3	5
硬式テニス	男子	7	7	6	2	3	6	7	1	1	10	4	4	2	8	5	3
	女子	7	7	2	8	5	3	3	6	4	4	6	2	1	10	7	1
ヨット		7	6	4	4	5	3	6	2	不参加※3		2	8	3	6	1	10
水泳	男子	7	7	3	6	5	3	6	2	4	4	1	10	2	8	7	1
	女子	7	7	1	10	3	6	7	1	4	4	5	3	2	8	6	2
空手道		7	7	5	3	4	4	2	8	7	1	3	6	1	10	6	2
少林寺拳法		7	7	4	4	6	2	3	6	7	1	2	8	1	10	5	3
剣道	男子	7	7	7	1	5	3	4	4	6	2	3	6	1	10	2	8
	女子	7	7	4	4	3	6	5	3	2	8	7	1	6	2	1	10
バスケットボール	男子	7	7	2	8	5	3	7	1	1	10	4	4	3	6	6	2
	女子	7	7	2	8	1	10	7	1	3	6	6	2	4	4	5	3
ハンドボール		7	7	3	6	4	4	5	3	1	10	2	8	6	2	7	1
陸上競技	男子	7	7	5	3	3	6	1	10	6	2	2	8	4	4	7	1
	女子	7	7	3	6	6	2	4	4	1	10	2	8	7	1	5	3
フェンシング		6	6	4	3	2	6	6	1	該当団体なし		1	8	3	4	5	2
バドミントン	男子	7	7	3	6	2	8	5	3	4	4	6	2	7	1	1	10
	女子	7	7	1	10	4	4	5	3	2	8	3	6	7	1	6	2
ラクロス	男子	7	6	5	3	6	2	1	10	2	8	不参加		3	6	4	4
	女子	7	7	3	6	7	1	2	8	6	2	1	10	5	3	4	4
準硬式野球		7	7	4	4	3	6	5	3	2	8	7	1	1	10	6	2
バレーボール	男子	7	7	1	10	7	1	3	6	4	4	2	8	6	2	5	3
	女子	7	7	2	8	4	4	7	1	3	6	6	2	5	3	1	10
硬式野球		7	6	2	8	6	2	不参加		1	10	5	3	4	4	3	6
弓道	男子	7	7	1	10	2	8	3	6	6	2	4	4	5	3	7	1
	女子	7	7	1	10	3	6	2	8	6	2	5	3	4	4	7	1
自動車		7	7	3	6	2	8	7	1	4	4	5	3	1	10	6	2
ソフトテニス	男子	7	7	3	6	7	1	6	2	5	3	4	4	1	10	2	8
	女子	7	7	2	8	7	1	5	3	3	6	1	10	4	4	6	2
アーチェリー		7	7	7	1	4	4	6	2	3	6	2	8	1	10	5	3
ゴルフ		7	6	6	2	5	3	3	6	1	10	2	8	4	4	不参加	
体操		7	7	3	6	7	1	6	2	1	10	4	4	2	8	5	3
卓球	男子	7	7	4	4	2	8	6	2	7	1	1	10	3	6	5	3
	女子	7	6	3	6	5	3	不参加		1	10	6	2	2	8	4	4
総合得点				206.5		166		138		202		188.5		209		152	
総合順位				2		5		7		3		4		1		6	

※1 東大のアイスホッケーの記録は、エントリー用紙の紛失・提出期限遅れのため総合順位での当該記録は抹消され0点とする。（不参加扱い）

※2 京大の航空の記録は、エントリー用紙の提出期限遅れのため総合順位での当該記録は抹消され0点とする。（不参加扱い）

※3 名大のヨットはオープン参加として扱い、総合順位には加味しない。（不参加扱い）

・大学数とは当該競技を行う団体が存在する数を指す。

・参加校数とは実際に七大学に参加した大学数を指す。



歴代記録は七大学公式ホームページ (<http://www.7-u.jp/>) で閲覧できます。

「大阪大学中之島ヘルスケアクラブ」オープン!

大阪大学中之島ヘルスケアクラブ 所長 武田 裕

■ ヘルスケアクラブの概要

大阪大学設立の地で、理学部、医学部、歯学部があった「中之島」に大阪大学中之島センターが平成16年に開設され、大阪大学と社会との交流の場として順調にその成果をあげています。

このたび中之島センター事業の一環として、本学の教職員やOB、同窓会会員、学生保護者、後援会その他の関係団体の役職員等を対象に健康管理や疾病予防などのヘルスケアサポートを目的とした会員制の健康管理事業を開始するため、「大阪大学中之島ヘルスケアクラブ」が10月にオープンしました。

「地域に生き世界に伸びる」大阪大学の新たな事業が、本学の医学部附属病院、歯学部附属病院の全面協力のもとに展開されます。

両附属病院にとっても、疾病にかかる前の「未病」状態という方々を対象とすることにより、今後の医療サービスの新たな領域の開拓につながるという期待もあります。

相談には両附属病院の医師、歯科医師が対応し、顧問ドクターとして専門的なアドバイスを提供することにより、非常にクオリティの高い健康相談が可能になります。

また、ヘルスケアクラブには医学部附属病院の事務職員と派遣職員が常駐しておりますので、各種問い合わせ等に常時対応するシステムをとっています。

- ◆事業名 会員登録制の有料健康管理事業
- ◆場所 大阪大学中之島センター8階
- ◆事業母体 大阪大学中之島センター
- ◆協力 医学部附属病院、歯学部附属病院
- ◆事業開始 2006年10月
- ◆事業内容
 - 1) ヘルスケアカウンセリング
 - 2) 医療機関及び医師紹介
 - 3) ヘルスケアセミナー・啓発活動
- ◆会員資格 本学教職員（OB含む）、同窓会会員、学生保護者、本学関係団体の役職員及びこれらの者から紹介を受けた方
- ◆募集会員 350名（第1次募集）
- ◆会費 31,500円（税込）
（会員証発行料1,500円が入会時に別途必要）
5回分の相談・セミナーのプリペイド方式
- ◆営業日 月・火・木・金（医師による相談日）
水（歯科医師による相談日）
10:00～12:00、13:00～15:00
（当分の間、午後（13:00～15:00）のみ営業）
土（セミナー開催時）
（日・祝/休業 夏季・年末年始休業あり）

「大阪大学中之島ヘルスケアクラブ」のサービス

ヘルスケアカウンセリング

ドクターが直接健康上の悩みについて丁寧にお答えします。

（事前予約が必要）

ヘルスケアセミナー

今流行の健康増進法や疾病予防のテクニックなどを専門の医師がわかりやすく解説します。（事前申込が必要）

ドクター紹介

健康状態やライフスタイルに合った専門医を紹介します。

（カウンセリング時に申し込む）

■ 内覧会を開催

事業開始に先立ち、10月2日(月)に、宮原秀夫総長をはじめ、役員、各部局長その他関係者を招き、新装されたヘルスケアクラブの内覧会が開催されました。

宮原総長からは、「この中之島センターは大阪大学の社会貢献の拠点であり、ヘルスケアクラブの設立は、本学の理念の実現に向けた活動の一つと位置づけられ、大変意義深いものである」との挨拶がありました。また、荻原俊男医学部附属病院院長から、「医療は今や『治す』ことではなく『病気になる』ことが最大のテーマであり、これまでなかなか市民の方々に披露することが難しかった『日常のヘルスケア』を適切にお伝えしていくことができる」と、続いて雫石 聡歯学部附属病院院長から、「専門歯科医に是非カウンセリングを受けていただきたい」と両病院が全面的に支援するとの挨拶がありました。



内覧会において。(左から)武田所長、宮原総長、荻原医学部附属病院院長、雫石歯学部附属病院院長



相談室は、プライバシーの確保に配慮した全個室型

OSAKA UNIVERSITY Nakanoshima Healthcare Club 『大阪大学中之島ヘルスケアクラブ』

大阪市北区中之島4-3-53 (大阪大学中之島センター8階)

入会申込み・お問合せ 06-6444-2140

たけだ・ひろし

プロフィール

昭和54年3月：大阪大学医学部採用、文部省（現文部科学省）学術調査官等を経て、平成10年4月医学部附属病院教授、平成13年4月医学系研究科教授、平成18年1月から中之島センター長兼務、平成18年10月から現職兼務

竹内裕子助手「日本生理学会奨励賞」受賞

大学院生命機能研究科生体ダイナミクス講座の竹内裕子助手が、日本生理学会奨励賞を受賞しました。この賞は日本生理学会総会において、これまでの研究実績により評価され、生理学の発展に貢献した若手生理学会会員（37歳以下）に授与されるものです。

今回受賞対象となった業績には、嗅覚の感覚神経細胞における「匂い」受容の分子メカニズムの解明、ナノスケール構造体内における定量的な解析があげられます。特に嗅細胞内情報伝達に関わるセカンドメッセンジャー分子特定の議論は過去20年に渡り引き続いていましたが、その議論に終止符を打った研究はロックフェラー大学出版の生理学専門誌においても高い評価を受けたことは特筆すべきポイントです。

受賞式は3月29日(水)、第83回日本生理学会大会内で行われ、受賞講演が行われました。



(大学院生命機能研究科)

増原 宏教授「日本分光学会賞(学術賞)」受賞

大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻応用物理学講座の増原 宏教授が、「日本分光学会賞(学術賞)」を受賞されました。

この賞は、優れた分光学的業績をあげた者に贈られる賞で、毎年2件以内の優れた研究が選ばれ、授与されます。今回の受賞は、増原教授の「時空間分解分光のための新手法の開発と分子系ダイナミクス研究への応用」における業績が、各種時空間分光法を開発しそれを駆使して、不均一固体の光化学ダイナミクス、単一微粒子の反応と光学特性、薄膜のレーザーアブレーションダイナミクスをはじめて分子論的に明らかにしたとして評価されました。この一連の研究はナノサイエンス・ナノテクノロジー時代における分光学的とダイナミクス研究の重要性を示すものです。

授賞式は、5月16日(火)に東京工業大学百年記念館で行われ、賞状と賞牌が授与されました。



(大学院工学研究科・工学部)

審良静男教授「2006年度コーリー賞」受賞

2006年度のWilliam B. Coley Award for Distinguished Research in Basic Immunologyが微生物病研究所の審良静男教授に授与されました。受賞対象は、Toll-like receptorsによる病原体認識から自然免疫発動までの機構の解明における貢献に対してで、米国La Jollaのスクリプス研究所教授のBruce Beutlerとの共同受賞です。この賞は、1975年に癌免疫療法のパイオニアであるWilliam B. Coleyを記念して創られたもので、基礎免疫学や腫瘍免疫学の分野で著明な業績をあげた研究者を、米国癌研究所が表彰するものです。

授賞式は、6月27日(火)にニューヨークのロックフェラーセンターで行われました。



(微生物病研究所)

鈴木不二男名誉教授 日本骨代謝学会「特別賞」受賞

鈴木不二男名誉教授は、軟骨代謝の新たな研究分野を開拓し、多くの研究者を育成され、さらに日本骨代謝学会の発展に貢献したとして、平成8年7月、停年退官の年に「日本骨代謝学会賞」を受賞されましたが、今回は、同学会の英文誌、Journal of Bone and Mineral Metabolism (JBMM) の再建に大きく貢献したとして、同学会の「特別賞」を受賞されました。

鈴木名誉教授は、平成5年末に、当時、投稿数が激減していたJBMMを再建するべく理事会よりEditor-in-Chiefに就任して日本およびアジア地区からの情報発信の中核雑誌とするようにと強く要請されました。そこで、まず出版社をSpringer Internationalに変更し、投稿規定の全面的な改訂、優秀なeditorial secretaryの採用、Editorial Boardの若返りによる抜本的な改組、またInternational Advisory Boardを新設して、内外の優れた研究者に総説の執筆を依頼するなど、種々の改革に取り組んでこられたところ、平成15年になってやっとJBMMがCurrent Contentsに搭載されました。さらに2000年に初めて記録されたimpact factorも最近では日本の医学生物学系英文学術誌の中でベストテンに迫るところまで上昇し、海外からの投稿も急激に増加しましたので、本年3月末にEditor-in-Chiefを交代されました。その際、Editor Emeritusの称号を受けられましたが、今回、さらにその功績を称えて「特別賞」を受賞されたものです。

表彰式は、7月7日(金)に東京ファッションタウン（お台場）で開催された第24回日本骨代謝学会学術集会の総会に引き続いて行われました。



(大学院歯学研究科・歯学部)

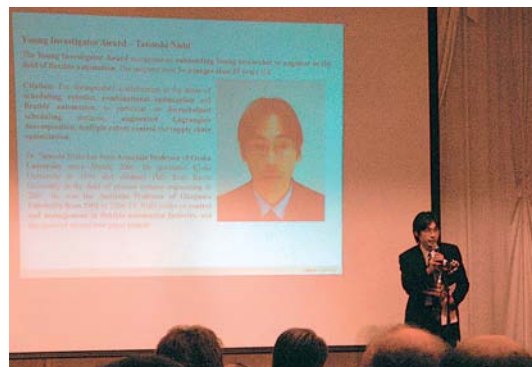
西 竜志助教授ISFA2006で「Young Investigator Award」受賞

大学院基礎工学研究科の西 竜志助教授は、2006年7月に大阪で開催された国際会議 ISFA2006（2006 International Symposium on Flexible Automation）において、Young Investigator Awardを受賞しました。

この賞は、フレキシブルオートメーションに関して歴史があり、世界的にも有名な国際会議の一つである国際FAシンポジウムや過去の日米FAシンポジウムへの参加者だけでなく、科学技術論文や特許、およびその他の活動のオートメーション分野における貢献の大きい35歳未満（受賞時）の若手研究者へ授与される賞であり、西助教授が選ばれました。

西助教授は、FMS（Flexible Manufacturing System）における生産スケジューリングやロボティクス、SCM（Supply Chain Management）における離散最適化手法とその応用に関する研究を行っており、特に分散型スケジューリング手法、拡張ラグランジュ分解・調整法、複数台移動ロボットの経路計画アルゴリズム、サプライチェーンの分散型最適化などの一連の研究が高く評価されました。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）



松田准一教授に「The Meteoritical Society Fellow」の称号授与

大学院理学研究科宇宙地球科学専攻の松田准一教授に「The Meteoritical Society Fellow」の称号が授与されました。

The Meteoritical Societyは、隕石や惑星を研究する世界の研究者からなる国際学会で、Fellowは、特筆すべき優れた業績を挙げた者に与えられる称号です。

松田教授のこれまでの隕石中の希ガス同位体比による一連の研究とその業績（隕石中のダイヤモンドの成因、鉄隕石の起源、テクタイトの起源、希ガス濃縮物質の研究など）が認められたものです。

授与式は、8月6日（日）から11日（金）にスイスのチューリヒで開催されたThe Meteoritical Societyの第69回年会において行われました。年会4日目の8月9日（水）の総会において、The Meteoritical Societyの会長であるケルン大学のバルメ博士から、賞状が授与されました。



（大学院理学研究科・理学部）

新教授紹介

木 村 正 (きむら ただし)

大学院医学系研究科



所 属：大阪大学医学系研究科器官制御外科学
講座（産科学婦人科学教室）
専門分野：生殖（妊娠・分娩）の生理、病態解析、
婦人科臨床腫瘍学

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 60. 7 医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
- 61. 7 労働福祉事業団大阪労災病院産婦人科
- 63. 7 大阪大学医学部研究生（産科学婦人科学教室）
- 平 3. 5 医員（大阪大学医学部附属病院）
- 3. 8 大阪大学助手医学部
- 11. 4 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 13. 1 大阪府立成人病センター病院婦人科医長
- 14.10 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 17.10 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 18. 9 大阪大学教授大学院医学系研究科

姫 野 勉 (ひめの つとむ)

大学院国際公共政策研究科



所 属：大学院国際公共政策研究科国際公共政
策専攻システム統合講座
専門分野：国際関係論・国際経済交渉論・国際経
済法

【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学法学部法学科卒業
- 55. 4 外務省入省
- 56. 7 在イギリス日本大使館
- 61. 1 アジア局南西アジア課 課長補佐
- 63. 7 北米局北米第一課 課長補佐
- 平 2. 7 経済局国際機関第二課 首席事務官
- 4. 8 在アメリカ日本大使館 一等書記官
- 7. 8 経済局国際機関第一課 企画官
- 9. 7 領事移住部 邦人特別対策室長
- 10. 8 経済局 国際経済第二課長
- 12. 8 欧亜局 西欧第二課長
- 13. 7 内閣官房内閣参事官 兼内閣副広報官
- 14. 1 在シンガポール日本大使館 参事官
- 15. 8 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部 公使
兼在ジュネーブ日本総領事館 首席領事
- 18. 9 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科

宮 越 龍 義 (みやこし たつよし)

大学院国際公共政策研究科



所 属：大学院国際公共政策研究科比較公共政
策専攻比較公共政策講座
専門分野：金融論

【略歴】

- 昭52. 3 東北大学経済学部経済学科卒業
- 52. 4 新日本製鐵株式会社
- 53. 4 東北大学経済学部研究生
- 56. 3 東北大学大学院経済学研究科経済学専攻博士前期課程修了
- 58. 3 東北大学大学院経済学研究科経済学専攻博士後期課程退学
- 58. 4 岩手県立盛岡短期大学講師
- 62. 4 弘前大学助教授人文学部
- 平 4. 4 新潟大学助教授経済学部
- 7. 4 新潟大学教授経済学部
- 9. 9 経済学博士（東北大学）
- 14. 4 筑波大学教授社会工学系
- 16. 4 筑波大学教授大学院システム情報工学研究科
- 17. 4 東北大学教授大学院国際文化研究科
- 18. 9 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科

新教授紹介

利 博 友 (り はくゆう)

大学院国際公共政策研究科



所 属：大学院国際公共政策研究科国際公共政策専攻国際公益システム講座
専門分野：国際経済学、開発経済学、東アジア経済論、応用一般均衡分析

【略歴】

- 昭53. 5 米国コーネル大学経済学部卒業
- 55. 8 米国ウィスコンシン大学大学院経済学研究科修士課程修了
- 60. 8 米国カリフォルニア大学バークリー校経済学部インストラクター
- 62. 9 米国カリフォルニア大学バークリー校国際関係研究所研究員
- 63. 9 米国カリフォルニア大学アーバイン校経済学部助教授(～平8.3)
- 63.12 米国カリフォルニア大学バークリー校大学院経済学研究科博士課程修了
- 63.12 Ph.D.経済学(カリフォルニア大学バークリー校)
- 平 5. 9 経済協力開発機構(OECD)エコノミスト
- 8. 4 名古屋大学助教授大学院国際開発研究科
- 11. 4 神戸大学助教授経済経営研究所
- 13. 6 (財)国際東アジア研究センター主席研究員・地域総合研究室長
- 16. 4 神戸大学教授経済経営研究所
- 18. 9 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科

四 方 哲 也 (よも てつや)

大学院情報科学研究科



所 属：大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻生物共生情報工学講座
専門分野：実験進化、生命複雑系

【略歴】

- 昭61. 3 大阪大学工学部醸酵工学科卒業
- 63. 3 大阪大学大学院工学研究科醸酵工学専攻博士前期課程修了
- 平 3. 3 大阪大学大学院工学研究科醸酵工学専攻博士後期課程修了
- 3. 3 工学博士(大阪大学)
- 3. 5 大阪大学助手工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 12.10 東京大学助教授大学院総合文化研究科(併任)(平16.3まで)
- 14. 4 大阪大学助教授大学院情報科学研究科
- 16. 6 東京大学客員助教授大学院総合文化研究科(平17.3まで)
- 18. 8 大阪大学教授大学院情報科学研究科

島 岡 ま な (しまおか まな)

大学院高等司法研究科



所 属：大学院高等司法研究科法務専攻
専門分野：刑法

【略歴】

- 昭60. 3 慶應義塾大学法学部卒業
- 62. 3 慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専攻修士課程修了
- 平 2. 3 慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専攻博士後期課程単位修得退学
- 2. 4 日本学術振興会特別研究員(～平4.3)
- 5. 7 グルノーブル大学大学院法学研究科上級研究課程修了
- 7. 4 盛岡大学文学部専任講師
- 11. 4 亜細亜学園亜細亜大学法学部専任講師
- 12. 4 亜細亜学園亜細亜大学法学部助教授
- 15. 4 大阪大学助教授大学院法学研究科
- 16. 4 大阪大学助教授大学院高等司法研究科
- 18.10 大阪大学教授大学院高等司法研究科

新教授紹介

棟 居 快 行 (むねすえ としゆき)

大学院高等司法研究科



【略歴】

- 昭53. 3 東京大学法学部第1類（私法コース）卒業
- 53. 4 東京大学助手法学部
- 56. 7 神戸大学助教授法学部
- 平 3. 4 神戸大学教授法学部
- 11. 4 成城大学教授法学部
- 16. 4 北海道大学教授大学院法学研究科
- 18.10 大阪大学教授大学院高等司法研究科

所 属：大学院高等司法研究科法務専攻
専門分野：憲法（特に人権論）

鷺 尾 隆 (わしお たかし)

産業科学研究所



【略歴】

- 昭58. 3 東北大学工学部原子核工学科卒業
- 60. 3 東北大学大学院工学研究科原子核工学専攻博士課程前期修了
- 62. 4 日本学術振興会特別研究員
- 63. 3 東北大学大学院工学研究科原子核工学専攻博士課程後期修了
- 63.10 米国マサチューセッツ工科大学原子炉研究所客員研究員
- 平 2. 2 (株)三菱総合研究所応用工学部門副研究員
- 3. 4 (株)三菱総合研究所科学・技術本部研究員
- 6. 4 (株)三菱総合研究所安全工学研究センター主任研究員
- 8. 6 大阪大学助教授産業科学研究所
- 18. 8 大阪大学教授産業科学研究所

所 属：産業科学研究所知能システム科学研究
部門
専門分野：高次推論、知識発見、データマイニング

東風西風

旧制浪速高校、阪大と阪大教養部

名誉教授 大塚 颯 三



私は旧制浪速高等学校の卒業生です。卒業間際に、阪大との合併問題があり、私はその対策委員として、大阪府会議員の間を巡り合併推進を学生の側から推進したものです。

浪速高校は阪大北校、大阪高校は南校としてともに阪大の教養部に再編された事は周知のところですが。

教養部は高い理想のもとに建設された組織でした。人間性の基礎を作る一般教養を担当するはずのところでしたが、旧制高校の先生をそのまま教養部教官にしたことが、一種の差別を生み、教養部教官とは研究に縁のない教育専従のスタッフだという認識が学部側にはありました。また教養という概念もアイマイで、一定期間（いわゆる前期課程）、一定の建物に学生を閉じこめて人文・社会・自然の何単位かを取得することを義務づけるという形がとられ、学生からは高校の繰り返しと非難され、学部教官からは専門教育の役に立たないことばかり教えてもらっては困ると勝手な注文が来しました。

やがて人員も入れ替わり、教養部にも立派な研究者が蟄集するようになりましたが、物質的条件は恵まれず、苦難の内に教育・研究を両立させる日が続きました。

やがてベルリンの壁が崩壊したのと同様に教養部と学部間の壁は崩れ、教養部は廃止されました。この頃、私は教養部長として文部省（現在の文部科学省）の大学課と丁々発止の日が続きました。私が一番心配したのは、教養部という組織を廃止することは賛成だが、教養そのものを廃止することにならないかということでした。教養とは各人が自らの意志で、一生かけて築くものだから、廃止したら大変なことになります。文部省側は決してそのようなことにはならないと太鼓判を捺し、教養に満ち溢れた専門教育を施すことが大学院大学の使命であり、大綱化の精神であると強調しました。

しかし現実には悪い方向に動いたと私は感じています。現在私は非常勤で理学部学生を教えています、彼らは教養を身につける余裕を持っていません。結果的には教養そのものが廃止の憂き目を見たようです。しかも廃止された教養の中には専門基礎となるべきものまで含まれていたから今大学は混迷の極にあります。

これを是正するのは共通教育を行う大学教育実践センターの責任だとされています。たしかに共通教育の大切さは喧伝され、共通教育賞なるものも誕生しました。しかし本当の教養を高める素地は十分に準備されているとは到底思えません。

別に真似をしろという訳ではありませんが、パリの L'Ecole Normale Supérieure では、自然科学を専攻する学生は文学、哲学、宗教学などを必修とし、その逆もまた然り。その結果、デカルト、パスカル、ポアンカレ、フェルマー等、文理の壁を越えた偉人が輩出しています。そのカケラも無いのが日本の現状です。一体日本の大学は何処へ行くのでしょうか？

日本で唯一教養学部を残した東京大学は、さすがです。東大教養学部には上記パリの ENS の素地が残っているようです。そして駒場の水準は一部では本郷の水準を凌駕するものもあると聞いています。



現在は姿を消している旧教養部物理教室の建物
(通称二号館) (昭和 60 年頃)

おおつか・えいぞう

プロフィール

元所属学部：大阪大学教養部 退官年次：平成 4 年 専門：半導体物理学

名誉教授の近況

山 崎 修一郎 (理・H8 退官)	幸い、健康に恵まれて、福井工業大学で定年まで勤めることができました。昨春辞めてからは、悠々自適とは斯くやの日々を過ごして居ります。時間的余裕のお陰で Progress 誌に投稿でき、今春掲載されました。未だ序の口なので、仮進生の心境で取り組んでいますが、飛蚊症と健忘症とで苦手のパソコンに対していのでなかなかです。先日はウィンドウズがダウンして、それを回復するには説明文は老眼鏡にルーペをかざして読まねばならず、難儀しました。体力が衰えるだけに、残された年月がますます貴重に感じられます。 皆様のご健勝をお祈りする次第です。
作 田 守 (歯・H8 退官)	退官直後の4年間は、歴史ある国際歯科研究学会 (International Association for Dental Research) の本部役員すなわち副会長、次期会長、会長、直前会長として、国際的に各種活動を行いました。会長として第77回総会を開催したのは Vancouver, Canada で、1999年3月でした。2001年に第79回総会が千葉の幕張で開催されたとき、時の総長岸本忠三先生にこの学会の創設者の名前を冠した W.J.Gies Distinguished Scientist Lecture を頂き、会員外の著名な科学者に差し上げる本学会の名誉会員をお受けいただいたことは大きな喜びです。その後は、Pierre Fauchard Academy という歯科医の国際団体の日本部会長や国際理事を務めると共に、co-dental staff の教育にも学校長として携わっております。
水 谷 幸 夫 (工・H8 退官)	1996年3月に定年まで2年を残して退官、近畿大学理工学部機械工学科に移りました。当時、附属図書館吹田分館長と工学部内規委員会委員長の任期途中でしたが、近大では熱工学の教授が二人同時に定年退職の予定で、乞われるまま決断しました。新しい職場には2003年3月の定年まで在職し、その間、工学部長補佐や研究科専攻長、学外では機械学会副会長を務めるとともに、ニューサンシャイン計画に参画しました。退職後は、2004年4月から2年間、知的財産権司法支援専門委員を務めましたが、聴力に自信が持てなくなり退任しました。現在、養賢堂の「機械の研究」誌に連載講座を掲載するとともに、講談社のブルーバックスシリーズに燃焼科学の文庫本を執筆中です。
松 田 福 久 (溶・H8 退官)	早いもので、退官後10年が過ぎました。現在のところ元気で過ごしております。 最近では東京での用事も減り、月1、2回程度の上京となりました。 今年、7月3日、私は長年、原子力発電の安全に溶接工学の立場から貢献したという事で、原子力安全功労者として内閣総理大臣表彰を受けました。新しい官邸を見せて貰うことができ、小泉総理、安倍官房長官、竹中、猪口各大臣にお会いする事ができました。丁度、2日前に総理はアメリカから帰国、又、2日後には北朝鮮のミサイル発射があり、幸い、その間の平穏な官邸での表彰式でした。今後も原子力発電設備の安全性の向上に溶接工学の立場より協力して行きたいと思っています。 どうか皆様もお元気でお過ごし下さい。

村 橋 俊 一 (基・H13 退官)	退官後5年が過ぎましたが、現在岡山理科大学工学部で大学院の講義、セミナー、博士研究員との研究などを行っております。この間にVCH－Wiley, Thieme－Verlag, 朝倉書店から本の出版も致しました。また日本学術振興会の創造機能化学委員会委員長や科学技術振興機構の科学技術振興審議会基礎研究部会委員などで東京出張も多く、海外出張もあり、充実した生活を送っております。小生の退官の頃から大学の運営の仕方が大きく変わりましたが、大阪大学のますますの発展を祈念いたしております。
森 本 益 之 (国公・H13 退官)	平成13年に退官し、摂南大学に移籍。法学部長2期を経て、平成17年10月から学長を努めております。残された学究生活をマイペースですごくつもりでしたが、思わぬ事態に遭遇しました。これも天命と受けとめ、ベストを尽くすことを肝に銘じています。 時代の大きな転換期を実感させられる昨今、大学も、国公私立を問わず、容易ならざる状況に置かれているようです。この時代であればこそ、大学にとって、変わるべきものと守るべきものを見極め、am Ende vorwärtsの精神を堅持して、活路を切り拓きたいと願っております。
浅 野 遼 二 (文・H16 退官)	「松江郷愁」 中学卒業50周年を記念して同窓会が「怪談」で有名なラフカデオ・ハーン所縁の大橋川畔の老舗旅館で開かれた。挨拶を依頼され、3年間、雨の日も雪の日も一緒に登校した同級生2人のことを一番の思い出と語ったが、1人は非業の死を遂げていた。それでも生者との再会の興奮に身をゆだねた。翌朝、宿のカーテンを開けると、目の前に宍道湖が梅雨時の薄陽に銀色を流したように広がり、蜆採りの小舟が何艘も出漁し大きな金具を湖水に差し込み採取していた。少年時代の夏、母が作ってくれた袋に蜆を一杯にした日々の汽水湖の塩っぼさ思い出した。懐かしさに誘われて妻と「堀川めぐり」の小舟に乗った。城周りの塩見縄手や椿谷の堀も、繁華な京橋の堀もすべて覚えている。昔風に外観を戻した米子橋を過ぎて人手に渡った実家の裏手にくると岸边にはびっしりと草木が茂り、内を見ることはできなかった。「怪談」の舞台、普門院の橋を抜けると北堀橋の向こうに松江城の黒く暗い姿が見えた。湖の優しさと城の厳しさ、これが松江への郷愁を誘う引力だと思った。
野 村 正 勝 (工・H16 退官)	退官してから古巣の工学研究科主催の名誉教授懇親会に三度ほど出席しましたが一度ピンチヒッターで話す機会があり喋ったところある先生から「ようしゃべるなあ」と言われました。教師は何処へ行ってもしゃべりたがる性癖があるのでしょうか。 さて現在埼玉の大宮にある私大へ週一度通っていますが、学生達に化学の面白さ、深さを如何に理解させるか、苦闘しています。 毎回の授業は大学の私のホームページに載せられ学生がアクセスできる仕組みです。同僚の先生方と相談しながらシラバスに沿って進めています。教えることは自らの勉強にもなっており、退官時の自身の想い、教育への専念が具体化されつつあるように感じています。

名誉教授の近況

柳 田 祥 三 (工・H16 退官)	平成16年4月阪大に発足した「先端科学イノベーションセンター」の特任教授として、官庁・企業からの研究支援で3つの研究課題に取り組んでいます。その課題とは、今話題の「色素増感型太陽電池」の研究、化学反応を変革する「マイクロ波の熱・電子触媒反応」に関する研究、ディスプレイ・照明関係で熱く求められている「強く光る光増感型希土類錯体」に関する研究です。「色素増感型太陽電池」の研究は、NEDOで新しくスタートする「太陽光発電システム未来技術研究開発」のテーマの一つに採択され、3名の博士研究員と外国からの訪問研究者、また、本センターのコーディネーターの諸先生のご支援を得て意欲的に取り組んでいます。
牛 尾 誠 夫 (接・H16 退官)	ご無沙汰しております。2006年4月から産業技術短期大学（旧鉄鋼短大）の学長に就いております。少子化、大学全入時代を迎え、その対応に忙しくしております。体力的には年相応にくたびれてきてはありますが元気に過ごしております。また、(財)近畿高エネルギー加工技術研究所で若い人たちとともに、レーザーやプラズマを利用したものづくり加工技術の開発研究を行ったりしております。
都 出 比呂志 (文・H17 退職)	私は文化財保護運動に取り組んでいます。 乙訓文化遺産を守る会の会長を3年前から引き受けました。大阪府文化財センター審議員、京都府文化財センター理事、長岡京市文化財審議会、豊中市文化財審議会としての保護活動に取り組んでいます。 研究の方では、古墳時代問題に取り組んでいます。
大 森 明 (接・H17 退職)	大阪大学接合科学研究所を退職して約1年半が過ぎました。現在は、材料の表面改質の総合メーカーであるトーカロ(株)・溶射技術開発研究所に技術顧問として週1～2回お世話になっております。トーカロ(株)の本社は神戸にあり、溶射技術開発研究所は正面に淡路島と明石大橋が見える風光明媚な明石の海に面しております。江坂の自宅からJR明石経由で山陽電車・東二見駅から徒歩20分の所にあり、初めて約2時間の通勤を経験しております。研究所員は主に30代の若手研究者を中心に約30名で構成されており、研究・技術内容も私が大阪大学で約30年間行ってきた研究と相通じるところがあり、若い研究者との討論・議論に花を咲かせて楽しんでおります。別に研球生活は継続しており、トーカロ(株)のテニス仲間との1ヶ月に1回のテニスを行っております。研究生生活と新たに加わった60の手習いとして水彩画教室での勉強を始めており、水彩画の作品は我が家の壁に張って楽しんでおります。

※原文のまま掲載しています。

松縄 朗名誉教授(接合科学研究所)逝去



本学名誉教授松縄 朗先生は、去る平成18年9月20日に病氣療養中のところ逝去されました。享年68歳。

先生は、昭和43年3月大阪大学工学部溶接工学科博士課程単位修得退学後、同年4月に大阪大学工学部溶接工学科助手に採用され、昭和52年溶接工学研究所に配置換、講師、助教授を経て、昭和61年に教授に昇任され、平成8年接合科学研究所教授に配置換となり、接合機構研究部門化学・生物接合機構学分野を担当されました。そして、平成14年3月31日定年退官され、大阪大学名誉教授の称号を付与されました。その後も、近畿高エネルギー加工技術研究所の顧問、(社)日本溶接協会レーザ加工技術研究委員会の副委員長、また、国際溶接会議第IV委員会委員長として世界の高エネルギー加工技術の発展に寄与されてきました。

同教授の研究活動は、大電流アーク放電現象の解明、水中溶接用局所乾式ガスカーテン法の開発、ガス切断時の超音速噴流と切断進行面との相互作用の解明、アーク溶接時の溶融池内湯流れのシミュレーションとそれに及ぼす各種因子の影響評価、レーザ誘起プラズマ・プルームの物性計測、アルミニウム合金のレーザ溶接性の評価、パルス波形

制御によるレーザ溶接性の改善、レーザ溶接欠陥生成機構の解明と抑制・防止法の開発、異波長重畳レーザ溶接法の開発、X線透視観察によるキーホールダイナミックスの解明など、広範囲に及んでいます。

このように、複雑なアーク現象やレーザ溶接現象の詳細な解明と学術的な解釈を通じて、産業界で問題となっている溶接欠陥の解消策に明るい展望を与え、多くの優れた業績を挙げ、国内外で高い評価を得ておられます。これらにより、平成6年米国レーザ協会フェロー、平成7年溶接学会業績賞、平成10年米国溶接協会フェロー、平成10年軽金属溶接構造協会論文賞、平成13年溶接学会論文賞、平成14年米国溶接学会 Comfort A. Adams Lecture Award、米国レーザ協会 Arthur L. Schawlow Award などを受賞されました。

学内においては、評議員、溶接工学研究所附属高エネルギー溶射研究センター長、接合科学研究所附属再帰循環システム研究センター長、超高エネルギー密度熱源センター長などを歴任され、溶接工学研究所の改組に尽力されました。また、入試試験委員会、学生生活委員会、図書館委員会、留学生委員会、国際交流委員会等の委員として、大阪大学の行政にも尽力されております。

学外においては、溶接学会溶接法研究委員会副委員長、溶接用語委員会委員長、水中溶接委員会委員長、日本溶接協会 LMP 委員会副委員長、軽金属溶接構造協会理事、編集委員会委員長、レーザ溶接委員会委員長、高温学会理事、米国レーザ協会理事、米国溶接協会フェローなどを務め、多大な貢献をされています。

以上のように、同教授は、数多くの優れた研究業績を挙げると共に、大学の発展、我が国の学協会および産業界の学術振興や国際化に多大の貢献をされ、後進の教育・指導育成に尽力されてきました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

ぶんしよかん 文書館設置準備室が動き出しました

■ 文書館設置準備室の体制

本年7月1日付けで文書館設置準備室（以下、「準備室」といいます。）が設置され、経済学研究科の阿部武司教授が室長に就任しました。その後10月1日付で専任教員として菅 真城講師が着任し、いよいよ準備室が本格的活動を開始しました。準備室には、室長、講師のほか、事務補佐員2名がまもなく着任する予定です。準備室に関する事務については、事務局各課及び各部局事務部の協力と総務部企画推進課のお世話になることとなっています。準備室では、大阪大学の歴史に関する文書の収集・整理・保存及び調査など、文書館設置に必要な業務を行います。

■ 文書館設置は大学としての国際標準

文書館（archives）といっても、本学ではご存知の方は少ないのではないのでしょうか？ しかし、それは欧米ですでに市民的な認知を得ています。このことは、「スターウォーズ」や「華氏911」といった映画にarchivesが登場することからもうかがえます。大学においても、図書館、博物館とならんで、archivesが設置されていることが一般的です。

残念なことに、日本においてarchivesは、市民に近い存在とは言えないのが現状です。文書館的施設を有する大学は、まだ少数です。しかしながら、この数年で日本の国立大学の中に文書館的施設の設置が進みました。7大学（旧帝国大学）をみると、文書館的施設がないのは本学のみです。7大学以外でも、広島大学にはすでに文書館が設置されており、私立大学では、早稲田大学などに文書館的施設があります。文書館を設置することによって、本学は国際的にも国内的にも、ようやく大学としての標準に到達したということが出来るでしょう。

■ 文書館ってどんなところ？何をするの？

大阪大学文書館は、大阪大学という機関の営みを示す資料を適切に収集・整理・保管し、それを学内や一般社会の人々に公開し、大学内外の教育研究及び大学の管理運営に寄与するところです。

大阪大学という機関の営みを最もよく示す資料は、法人文書です。法人文書にはそれぞれ保存年限が定められており、保存年限が満了した文書のうち大阪大学の機関としての営みや歴史を示す上で必要な文書を選び出し（これを「評価選別」といいます。）、その後も保存・公開していくことが文書館の最も重要な業務です。評価選別の結果、大多数の文書は廃棄されます。文書館は何でもとっておくところではなく、積極的に文書を廃棄していく機関でもあるのです。

古い文書がすべて歴史的資料として保存されるわけではありません。現在本学が作成・収受している法人文書は、将来において貴重な歴史的資料となるのです。新しい文書であっても歴史的資料となるものがあります。また、組織の改編などを行う際には、過去の類似した事例を参照することによって、その政策立案コストを安く抑えることが出来ます。国立大学も法人化に伴い経営感覚が必要とされていますが、こんな時にも文書館は役に立つのです。

法人文書以外にも、個人が所有している資料の中にも貴重な歴史的資料があります。広報誌などの学内刊行物や、時間割、シラバス、講義ノート、書類、メモ、ビラ、手紙、写真なども歴史的資料です。また、学生生活に関する資料も貴重な歴史的資料です。

■ 準備室からのお願い

準備室では今後、事務局及び各部局や研究室等で保存されている資料について、調査・収集活動を行います。各部局等のご協力をお願いします。また、個人で所有されている資料についても収集していきます。資料収集にご協力いただける方は、下記までご連絡下さい。

【連絡先】

〒560-8513 豊中市待兼山1-3

サイバーメディアセンター豊中教育実習棟3階

大阪大学文書館設置準備室

菅 真城（かん まさき）

電話：06-6850-6269 FAX：06-6850-6274

E-mail：kan@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp



収集文書のイメージ

（文書館設置準備室）

大学院工学研究科・工学部がラジオ番組を開始

大学院工学研究科・工学部は、平成18年10月から平成19年3月までの半年間、高校生、受験生及び保護者を対象に工学研究科・工学部の魅力をアピールするため、朝日放送ラジオ（1008kHz）でラジオ番組「どんなんなかな？阪大工学部」を開始しました。

番組の内容は、工学研究科・工学部の教員により自身の研究を紹介するコーナーや、在学生によるキャンパスライフを紹介するコーナーなど、工学系学部への興味を引くものとなっており、工学系学部の志願者の増加につながることを期待しています。また、女性教員・学生を優先して出演させ、ロールモデルを示すことで、女子学生の関心を引くことをねらいとしています。

また、今回実施するラジオ番組は、昨年度に制作したラジオ番組の後継として実施するものですが、火曜日の深夜に放送していたものを月曜日の午後9時に変更し、多くのリスナーを獲得するよう工夫を加えています。

初回の放送は、豊田政男工学研究科長が出演し、「工学部はどんなところ？」との質問に「工学部は、『夢を形に』『希望あふれる未来の実現』を支援します。」と答えるなど、受験生への応援メッセージを熱く語りかけていました。

（大学院工学研究科・工学部）



初回分の収録風景（右奥が豊田工学研究科長）

イングリッシュ・カフェへの誘い

「イングリッシュ・カフェ」が下記の要領で10月16日（月）から始まりました。

学内には留学生が多くなっていますが、一般学生と留学生が日常的に交流できる場がありません。このため、国際交流的な話題を中心に（ことばの問題も含め）異文化を背景とした学生が英語で意見交換する「イングリッシュ・カフェ」という場を設ける企画が発案されました。この企画は参加学生の英語運用力を養成するという重要な目標としています。この企画については、大学院言語文化研究科の「英語部会ネイティヴの先生と英語部会主任との懇談会」（月例）において、先生方全員の協力の合意が得られることになり、趣旨に賛同する留学生センターに部屋の提供をいただきました。この企画は、どれだけの参加者が有効利用するかによって、来年度以降の継続を検討する予定です。ぜひ、多数の方が参加されることを期待しています。

日 時：10月16日（月）からの平日の昼（月・木など）12：10－12：50
[期間10月－1月、4月－7月]

場 所：学生交流棟（豊中地区）2Fの「留学交流情報コーナー」
活動内容：一般学生と留学生が国際交流的なテーマを中心に英語で意見交換します。

形 態：英語のネイティヴ・スピーカーの教員が輪番で常駐し、当日のテーマを決めて、学生の英語についてのアドバイスを与えながら、討議の円滑な進行を図ります。

参 加 者：学部、大学院生（一般学生&留学生）、教職員も可。（参加費なし）

☆部屋は10－13人ほどのサイズで、お茶、コーヒーが飲めます。
（利用者は身分証を提示の上、ノートに学部氏名などを記載します。）
（大学院言語文化研究科）



企画に協力する先生方（左から、英語部会主任でこの企画の発案・実施責任者の成田一教授、又吉弘那、ロバート・マン、トレン・デヴォアー、ロバート・パーキンス先生、このほかジェリー・ヨコタ、アンドリュー・村上スミス、マルティン・ブレネス、ジョナサン・クレントン先生がこの企画に参加します。）

第47回大阪大学まちかね祭開催

今年のテーマは「阪大日和」

今年も大阪大学豊中キャンパスで、11月3日(金・祝)～11月5日(日)の3日間に渡り、『阪大日和』をテーマに第47回大阪大学まちかね祭を開催します。

近年サークル活動などがますます活発になり、まちかね祭においても日ごろのサークル活動における成果の発表、あるいは野外コンサート、講演会、スポーツ大会、模擬店等様々な企画が行われ、本学学生のみならず学外からも多くの来訪者で賑わっています。

皆様のお越しをお待ちしております。

開催期間：11月3日(金・祝)～11月5日(日)10:00～

開催場所：大阪大学豊中キャンパス(豊中市待兼山町)

・阪急電車宝塚線「石橋駅」(特急・急行停車)下車 東へ徒歩15分

・大阪モノレール「柴原駅」下車 徒歩約5～10分

主なイベント：LIVE IN HANDAI (4日17:30～・メインステージ)

クイズ・スペシャリスト (5日12:00～・サブステージ)

FINALE (5日14:15～・メインステージ) など、様々なライブやイベントが行われます。

※詳しくは、まちかね祭ホームページ「MACHIKANE FESTIVAL 2006 まちかね祭 2006」

(<http://www.machikanesai.com/index.html>) でご確認ください。



(大学祭中央実行委員会)

大阪大学室内楽アンサンブル第3回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル(OUCE)は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として昨年秋と今年春にMOホールにおいて演奏会を開催し、200名を超える皆様のご来聴をいただきました。第3回演奏会は吹田祭関連イベントとして開催いたしますので、皆様お誘い合わせの上ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。詳しくはOUCEのホームページ(<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>)をご覧ください。

日時：11月4日(土) 開場13:30、開演14:00

場所：大阪大学コンベンションセンター MOホール 入場無料

演奏曲目：モーツァルト 木管三重奏のためのディベルティメント 第4番 変ロ長調 K.439b

ベートーヴェン ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調 Op.97 「大公」 第1楽章

ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 第7番 ヘ長調 Op.59-1 「ラズモフスキー第1番」 第1楽章

ハイドン 2本のフルートとチェロのためのトリオ 「ロンドトリオ」 第1番 ヘ長調 Hob.4-1

ダマーズ 演奏会用ソナタ

ブラームス ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op.34 第3楽章

モーツァルト ディベルティメント 二長調 K.136

〈問い合わせ先〉 kai@chem.eng.osaka-u.ac.jp



(OUCE)

大阪大学総合学術博物館第1回特別展
「みる科学」の歴史—懐徳堂・中井履軒から超高压電子顕微鏡まで

期 間：10月30日(月)～11月24日(金)
開館時間：10：00～16：30（会期中は土・日・祝日も開館）
会 場：大阪大学豊中キャンパス 大学教育実践センター本館（イ号館）1階
主 催：大阪大学総合学術博物館
協 賛：大阪大学大学院文学研究科、財団法人懐徳堂記念会、
大阪大学超高压電子顕微鏡センター

大阪大学の精神的源流である懐徳堂で活躍した中井履軒は、終生自らの目で「みる」ことにこだわり続けました。身近な草花から、人体の内部や、はるかかなたの天体まで、自分の目で観察を続けた中井履軒の「みる科学」の足跡をたどるとともに、現在、1メートルの10億分の1まで観測することが可能となった電子顕微鏡の開発において、大阪大学が果たしてきた先導的な研究の足跡を紹介します。

主な展示物

1. 中井履軒に関する懐徳堂資料（大学院文学研究科所蔵）
天図、方図、『顕微鏡記』など
 2. 江戸時代の顕微鏡（個人蔵）
 3. コッホゆかりの顕微鏡（微生物病研究所所蔵）
 4. 国産初の電子顕微鏡第1号機（大学院工学研究科所蔵）
工学部の菅田教授らが1939年に我が国で最初に開発した加速電圧25,000Vの電子顕微鏡1号機
 5. 遠隔操作による超高压電子顕微鏡観察
超高压電子顕微鏡センターに設置されている加速電圧300万Vの世界最高の電子顕微鏡を用いた研究成果など
[ただし、遠隔操作は11/3(金)、11/12(日)、11/19(日)の3日間のみ]
- 〈問い合わせ先〉大阪大学総合学術博物館・事務室 TEL 06(6850)6715 FAX 06(6850)6720



（総合学術博物館）

公開シンポジウム「マチカネワニのいた時代」
大阪大学総合学術博物館第5回企画展

時 期：12月10日(日)・11日(月)
場 所：大阪大学中之島センター10階佐治敬三メモリアルホール（大阪市北区中之島4-3-53）
主 催：大阪大学総合学術博物館
共 催：北海道大学総合博物館、大阪市立科学館、大阪市立自然史博物館
内 容：10日 マチカネワニ・シンポジウム（マチカネワニ化石骨格の完全記載論文出版を記念して）
※後方にマチカネワニ化石の実物標本等の展示

11日 ワークショップ

〈プログラム（予定）〉

12月10日(日)

10：30－10：40	総長挨拶	
10：40－11：10	「マチカネワニの発掘と歴史」	亀井 節 夫（京都大学名誉教授）
11：20－11：50	「40万年前の植生」	百 原 新（千葉大学）
12：00－13：00	昼食、休憩	
13：00－13：30	「マチカネワニの系統関係とその意義」	小 林 快 次（北海道大学）
13：40－14：10	「病理学からみるマチカネワニの生態」	桂 嘉志浩（岐阜県博物館）
14：20－14：50	「マチカネワニとともに生きた哺乳類とその環境」	冨 田 幸 光（国立科学博物館）
15：10－16：00	パネル討論	

12月11日(月)

13：00－15：00 化石（レプリカ）の復元（組み立て）などのワークショップ（小林・桂）

〈問い合わせ先〉大阪大学総合学術博物館・事務室 TEL 06(6850)6715 FAX 06(6850)6720

（総合学術博物館）

第11回上海交通大学との学術交流セミナー

大阪大学では、大学間交流協定校である中華人民共和国・上海交通大学との交流事業の一環として毎年、テーマを決めて、相互交流を行っています。

今年度は11回記念にあたり、両大学における研究戦略に関する講演と、3つの分科会を中心としたより深い議論を行います。

みなさまのご参加をお待ちしております。

開催月日：平成18年11月20日(月)

開催場所：大阪大学吹田キャンパス〔銀杏会館、情報科学研究科〕

プログラム(予定)

(1) 開会式(通訳付き) 10:30～10:50〔銀杏会館3階ホール〕

(2) セッションⅠ(通訳付き) 10:50～11:30

両大学における研究戦略〔銀杏会館3階ホール〕

(3) セッションⅡ 持続的発展社会を目指す科学と技術 13:30～17:00(通訳なし。すべて英語)

・材料・ナノ工学と環境・エネルギー〔銀杏会館3階会議室〕

・情報技術と環境のネットワーク共生〔情報科学研究科〕

・化学と自然共生〔銀杏会館3階会議室〕

〈問い合わせ先〉研究推進・国際部国際交流課国際交流推進係(内線7038) TEL:06(6879)7038

kokusai@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp

(研究推進・国際部国際交流課)



第6回大阪大学フォーラム(サンディエゴ)

本学では、研究者の優れた研究活動等を広く海外に発信するため、毎年度1回テーマを厳選し、大阪大学フォーラムを開催しています。

第6回を迎える今年度は、世界的レベルのバイオメディカル研究が推進されているカリフォルニア州サンディエゴで、本学サンフランシスコ教育研究センターの協力を得て、本学及びカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)、Scripps, Burnham, Salkなどの研究機関の研究者が最先端の研究成果を報告します。

開催期間：平成18年12月4日(月)～5日(火)

開催場所：Hyatt Regency La Jolla(カリフォルニア州サンディエゴ)

テーマ：「Frontier of Biomedical Research and Beyond…」(医学研究の最前線とその未来)

開催内容：基調講演およびセッション

〔テーマ(1日目)〕Role of Glycosylation and Organelle in Disease / Stem Cell and Development

〔テーマ(2日目)〕Hard Tissue Destruction and Regeneration / Chemical Approach to Biomaterials / Immunity and Inflammation

☆詳細(講演者名、タイムテーブルなど)は大阪大学サンフランシスコ教育研究センターホームページ(<http://www.osaka-u-sf.org/forum/>(英語))をご覧ください。

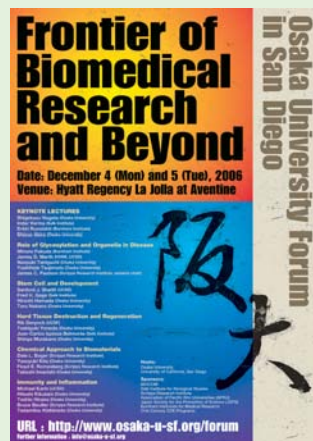
主催：大阪大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校

協力：Burnham Institute for Medical Research, Salk Institute for Biological Studies, Scripps Research Institute, Association of Pacific Rim Universities (APRU)、日本学術振興会サンフランシスコ事務所、BIOCOM

実行委員長：米田 俊之 歯学研究科教授

〈問い合わせ先〉研究推進・国際部国際交流課国際交流推進係(内線7038) TEL:06(3879)7038

(研究推進・国際部国際交流課)



平成18年度適塾記念講演会

適塾記念会では、緒方洪庵及び門下生の業績を顕彰するとともに、事業の一つとして毎年記念講演会を開催し、大阪における新しい学術、文化の成果をお伝えしています。

今年度も以下のとおり開催いたしますので、多数のご参加をお待ちしております。

講演1 「古代ギリシア・ローマの笑い、上方の笑いー喜劇の場合ー」

大阪大学大学院言語文化研究科教授 木村 健治 氏

古代ギリシアでは、紀元前5世紀から4世紀にかけて、「笑い」の文学である喜劇が誕生し、アリストパネスやメナンドロスという作家が人々を笑わせ楽しませていた。

一方、古代ローマでは、紀元前3世紀から2世紀にかけて、プラウトゥスやテレンティウスという作家が喜劇によって人々を笑わせていた。この古代ギリシア・ローマの喜劇の手法、笑いのしくみが、今日の上方の喜劇とどう通底するのかわかるのか、それを考えてみたい。

講演2 「ここまで進んだがん治療」

大阪大学大学院医学系研究科教授 門田 守人 氏

1981年以来、我が国の死亡原因のトップは悪性腫瘍で、亡くなる人の3人に1人はがんで死亡している。政府は1983年より対がん10カ年総合戦略を策定し、今では、それも第3次まで進んでいるところである。また、今年にはがん対策基本法が成立し、来年4月に施行されることになっており、我が国における大きな社会問題であることは未だに変わらない。一体がん治療は進んでいるのであろうか。講演では、外科治療を中心に、がん治療の現状と今後の展望について述べてみたい。

●日 時／平成18年11月29日(水)午後6時～8時

●会 場／大阪大学中之島センター

佐治敬三メモリアルホール (10階)

〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-53

TEL: 06 (6444) 2100

●受講料／無 料 (定員190名)

事前に下記『問い合わせ先』までお申し込みください

〈主 催〉大阪大学・適塾記念会

〈問い合わせ先〉大阪大学総務部総務課総務係

〒565-0871 吹田市山田丘1-1

TEL: 06 (6879) 7014 FAX: 06 (6879) 7008

〈会場周辺地図〉



【電車によるアクセス】

阪神本線 福島駅より	徒歩約9分
JR東西線 新福島駅より	徒歩約9分
JR環状線 福島駅より	徒歩約12分
地下鉄四つ橋線 肥後橋駅より	徒歩約10分
地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅より	徒歩約16分

【バスによるアクセス】

大阪市バス (53系統・75系統)
大阪駅前バスターミナル→田妻橋 下車 徒歩1分

(総務部総務課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する啓発活動の一環として、講演会を以下のとおり開催します。

教職員・学生の積極的な参加をお待ちしています。

近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

日 時：12月8日(金)15時30分～17時

場 所：大阪大学コンベンションセンター・会議室1 (吹田キャンパス)

講 師：関西大学外国語教育研究機構教授 熊谷 明泰 (くまたに あきやす)

演 題：『朝鮮総督府の「国語常用」政策と朝鮮語使用の抑圧』

〈問い合わせ先〉大阪大学総務部総務課総務係 TEL: 06 (6879) 7014

(総務部総務課)

阪大生のための手づくり情報誌

Handai Walker 編集長（基礎工2年）

米坂真司

阪大生に最も多く読まれる情報誌「Handai Walker」。

「Handai Walker」は、阪大生の身近なニュース、クラブ、サークルの紹介など学生生活に必要な情報を学生の目線でわかりやすく掲載して、阪大生だけでなく先生方も注目する情報誌となっています。

情報収集の苦心談や「見せる広報誌、情報誌」の観点から、編集部代表に話を聞きました。

■ 情報誌「Handai Walker」とはどんな雑誌？

阪大生協の機関紙として、1996年6月に創刊しました。阪大生協に学生委員会が設置され、最初の企画が阪大生のための情報誌の発刊でした。世間でもタウン情報誌いわゆる Walker 誌が多く読まれるようになり、名前も広く受け入れてもらうために名付けられました。

現在では、月4000部を発行しており、生協各食堂や図書館、学生部のカウンターにも置かせてもらっています。

編集部のメンバーは20名、毎週1回編集会議を開いています。メンバーがそれぞれ担当する記事を持ち寄り、他の委員会の協力も得ながら、全員で確認し内容をチェックしているんです。



編集会議の後にはすぐに校正作業を行います。



■ 読者の反応はどうか？

学生の間にはだいぶ浸透したと実感しています。記事の掲載依頼や、企画を持ち込んで来られることも最近は多くなりました。特に学生の身近で起こっている出来事については積極的に情報を掲載してほしいという要望が多いですね。

また、「教授インタビュー」や「研究室紹介」のコーナーもあるんですが、担当が取材に伺った際にも「阪大ウォーカーか、見てるよ」と言っていたり、取材活動が非常に和やかにできるんです。「今度取り上げてよ」と気さくに言ってくれたり先生方も多く、「次は、〇〇先生はどう？ 〇〇の研究室なんかどう？」とアドバイスをいただくこともあります。学生だけでなく先生方にもよく見ていただいていることは嬉しいし、心強いですね。



編集会議は夕方6時から。議論を交わし、夜遅くまでかかることもあります。

（阪大生協から）

学生の自主性を尊重し、企画、編集作業をすべて任せています。阪大生協は取材活動を円滑に行うためのサポートなどのバックアップを行っています。

この活動を通じて、自分達の大学と生協を知るいい機会になればと思っています。

<コメント>

ちょうど取材に伺った日が編集会議の日でした。編集長の指揮の下、編集に取りかかる部員の様子は真剣そのもので、阪大生全員に見てもらいたいという意気込みが十分に伝わってきました。

大学広報誌を担当する者として、どのようにすれば「見てもらえるのか」、「読んでもらえるのか」と言うことが重要であることを改めて考えさせられる機会となりました。

■ 編集で苦勞する点は？

月刊誌なのでとにかく締め切りに追われますね。毎月20日頃に出稿、初旬には発行ですので、すぐに次号の情報収集に取りかからないと間に合いません。その時点では、もう次号のアイデアを練らないと難しいですね。

創刊時にはメンバーも少なく、毎月の発行ができなかった時期もあったと聞いています。メンバーは授業の合間をうまくやりくりして取材活動を行っています。

また、編集部員は1, 2年生が主体になっていて、どうしても豊中キャンパスにいる時間が多いので、吹田キャンパスでの情報収集には苦勞します。今後はもっと豊中、吹田両キャンパスにまたがって、大学の情報も発信していけたらと考えています。

■ 今後の抱負

これからも引き続き、阪大生にしか書けない、学生の視点から見た、阪大生のための Handai Walker にしていきたいと思っています。

特に来年は創刊100号を迎えます。いろいろな角度から、阪大に密着し、誰からも親しまれる紙面作りを目指していきたいと思っています。



編集部のメンバー（前列右から3人目が米坂編集長）

バンコク教育研究センターについて

研究推進・国際部国際交流課海外拠点支援係 比 嘉 康 人

こんにちは。大阪大学バンコク教育研究センターに駐在しております比嘉と申します。今回は簡単にバンコクの様子などをレポートさせていただこうかと思います。

■ バンコク教育研究センターとは

私がバンコク教育研究センター（以下「バンコクセンター」）に派遣されたのは2006年の7月です。バンコクセンターは発足したのが2006年の4月という、まだまだできたばかりの新しい事務所です。サンフランシスコ、グローニンゲンに続く阪大の3つ目の海外拠点として設置されました。

「バンコクセンターはどういう仕事をしているの？」とよく聞かれるので、簡単に説明したいと思います。まず、タイから阪大へ来ている学生、研究者や、阪大からタイへ研究しに行っている学生、研究者が多数おられるわけですが、こういった方々がスムーズに研究をできるようにさまざまなサポートをしたり、新しいネットワークが形成されるように人と人との間をコーディネートしたりしています。阪大に留学したいというタイの学生をできるだけ多く獲得するために、タイの学生に向けて情報の発信や資料の提供も行っています。

現在阪大はタイの2つの大学及び1つの研究機関との間



に組織全体としての交流協定を、3つの大学との間に学部間の交流協定を結んでいます。そしてこの2006年10月より、新たに3つの大学と大学間協定を結ぶことになっており、阪大とタイとの結びつきはますます強くなっています。その他にも、生物工学国際交流センターとタイのマヒドン大学によるCRC、微生物病研究所とタイの国立保健省によるRMIDなど、阪大がタイと協力しているプロジェクトも多数あります。こういった学術交流をサポートしつつ、



バンコクセンターが入っているサーミットタワービル

さらに新しい学術交流を促進するためにシンポジウム、講演会などを企画しています。

バンコクセンターの活動の範囲はタイだけに限らずタイの周辺の東南アジアの各国をターゲットにしています。東南アジア地域の日系企業との協力や、各種イベントに参加することによって東南アジア地域における阪大のプレゼンスの向上に努めています。他にもタイにおける阪大同窓生のネットワークの構築など、大阪大学の活動を国際的に広げるために日々尽力しています。

バンコクセンターのオフィスは Asok 通りという、バンコク市内の中心部にあります。高架鉄道と地下鉄が走り高層ビルが立ち並ぶ、バンコクで最も発展しているエリアの一つです。ただし、高層ビルが立ち並ぶ一方で路上に目を移すと、一転して屋台や露天が並んだごちゃごちゃした感じになっているのが、日本のオフィス街と違うところです。私は大阪でも天神橋筋商店街などのごちゃごちゃして活気がある場所が好きだったので、この東南アジア的な雑然さを居心地よく思っています。



勤務中の筆者

■ 物価の差

タイは基本的には日本よりも物価は安いのですが、ものによって相場が違います。屋台や露天で売っている食事やフルーツやお菓子などは、日本の3分の1から5分の1くらいでしょうか。フルーツはさすが熱帯だけあって充実しています。マンゴー、パパイヤ、パイナップル、ドリアン、ジャックフルーツ、ロンガン、その他いろいろなフルーツがとても安く手に入ります。

バンコクの中心部はビルが建ち並ぶ都会で、そこにある店もマクドナルドやKFC、スターバックスなど、日本でもおなじみのチェーン店がたくさんあります。大きなデパートやショッピングセンターには必ずこれらの店が入っています。ただこういった欧米的な店の価格は、日本よりも少しだけ安い、というくらいです。日本人にとっては少し



サーミットタワーの側の道路の様子

安いですが、平均的なタイ人にとっては高い食べ物です（その代わりこういったファーストフードなどでは外国人向けに英語のメニューが完備しており店員はみんな英語を喋ることができます）。日本ではマクドナルドなんて今では安い食べ物の一つですが、タイではそうではありません。日本でも何十年前は、マクドナルドは高くて憧れの食べ物だったのかな？と思いました。



ジャックフルーツの屋台

■ タイの中の日本

タイには現在約3万人の日本人が住んでいると言われていいます。その内訳は、企業の駐在員とその家族が多いです。バンコクの中で駐在員がたくさん住んでいる地域がスクンビット通り沿いで、バンコクセンターと私の住んでいるアパートもこの近くにあります。

この地域は日本人が多いので、日本人向けの店がたくさんあります。日本料理屋、日本の食材を扱うスーパー、日本語の本を売っている書店（紀伊国屋書店もあります）、日本語が通じる散髪屋など、この地域に住めば、全くタイ

語も英語もできない日本人でも、生活の不自由はまったくありません。ただし、その代わりにこれらの日本人向けの店の値段は、タイ人向けの店の値段の3、4倍くらいします。特に、日本から輸入しているもの（日本の食材や日本の本）は、日本で買うよりも高くなっています。日本では3パック100円で売っている納豆が、こちらでは3パック100パーツ（約320円）になってしまうのが悲しいところです。

日本文化はタイではかなり浸透しているため、この日本人街以外の地域でも、バンコクでは日本のものをたくさん見ることができます。日本食はタイ人の間でもとても人気なので、日本食屋はスクンビット地域以外にもたくさんあり、タイ人がとんかつ定食や親子丼やラーメンを美味しく食べています。本屋やCD屋さんに行くと日本の本の翻訳や日本の歌手のCDがたくさん売っています（特にマンガはたくさん翻訳されています）。日本の企業もたくさん進出していて、TOYOTAの車やセブンイレブンやファミリーマートはタイの街のそこかしこで見ることができます。他にも日本の企業のお店では、TSUTAYAやミスタードーナツややよい亭や、10分1000円の散髪屋さん（こちらでは10分100パーツ）などがあります。

基本的にタイの人は日本に対して好意を持っているので、みんな親切で優しいです。そのおかげで特に嫌なこともなく快適に暮らしています。



タイのセブンイレブン

■ 王様について

月曜になるとバンコクの街は黄色でいっぱいになります。街を行く人の80%くらいの人が、同じ黄色いシャツを着ているからです。この、王様の紋章の付いた黄色いシャツが今タイでは大人気です。

タイ人はみんな、自分が何曜日に生まれたのかを知っています。そして各曜日にはそれぞれラッキーカラーのように色が割り当てられています。今の王様の誕生日は月曜日、月曜日の色は黄色です。月曜日に黄色いシャツを着て

いる人たちは、みんな王様への敬意を表しているのです（私も一着持っています）。

タイでは王様がとても敬愛されています。街のあちこちには王様の写真が飾られています。王様の紋章が付いた iPod nano が台数限定で売り出され、あっという間に売り切れてプレミアがついたりしているくらいです。

こんな風に街の80%の人が同じ服を着るほど国民が精神的にまとまっているのは、日本では考えられないですね。国民性の違いを感じました。



街のいたる所に王様の写真が飾られている

■ クーデターについて

9月19日に起こったタイのクーデターは日本でも大きく報道されたようなので、知っている方も多いと思います。私も日本の友人から心配する電話をたくさん受けました。

私も最初はとてもびっくりしたのですが、いろいろと調べたりタイ人の人に話を聞いたりしてみると、タイのクーデターはそれほど危険ではなく極めて平和的なものだということがわかり、安心しました。タイでは政権交代の際にクーデターが起こるのはそれほど珍しいことではないようです。1932年に立憲君主制に移行してから未遂を含めて16回のクーデターが起こっています。そしてそのほとんどは死者も出ず、平和的に政権の交代が行われています。言ってみれば、内閣総辞職の少し乱暴なもの、というくらいの捉え方でよいような気がします。みんなクーデターに慣れているので、クーデターが起こっても別に慌てることもなく、普通通りでした。慌てているのは外国人だけでした。

政権交代の手段がクーデターという全く民主主義的な手

続きではないにも関わらず、タイの国内状況が特にひどいものになっていない理由は、上に書いた国民の精神的なまとまりという理由があると思います。タイのクーデターは国民の大多数がそれを待ち望んでいるような状況でないと起こりません（そうでないクーデターは失敗することになっています）。大多数の支持の上で起こったクーデターなので混乱はあまり起きません。そして、その国民の精神的なまとまりの中心にいるのが国王です。国王が承認すれば、クーデターという法律を無視した手段でも全く混乱はありません。クーデター後に行われたアンケートでは、クーデターを支持する人は84%にのぼるという結果が出ています。理想的には民主主義的な手続きで政治の改革が行われるべきだと思いますが、実際的には民主主義だけでは良くな

ない状況があります。

市民の生活についてはクーデターの前と後で全く何も変わっていません。日本から見ると不安に思えるかもしれませんが、現在のタイはとても平和です。みなさん安心してタイにいらっしゃってください。

以上で、バンコクの様子を少しは伝えることができたでしょうか。もし何かバンコクセンターに興味を持たれた方がおられましたら、気軽に御連絡ください。何かの研究や学会でタイに来られた場合に、仕事場としてバンコクセンターを使っていただくこともできますし、気軽にお立ち寄りいただければうれしいです（連絡先：oubc02@ji-net.com）。どうぞよろしくお願いいたします。



凄い勢いで高層ビルが増えているバンコク市街



観光名所のひとつ、ワット・ブラケオ

茶道部

作法という感謝の気持ちを、おいしく学ぶ。

“茶道”と聞くと、着物であったり作法であったり、堅いイメージを抱く方が多いと思います。たしかに茶道にはそういった面もありますが、茶道で中心となるもっとも大事なことは、「おいしくお茶をいただく」ということです。

こんなことを言う「ウソだろう、やっぱり作法なんでしょ」、と思われるかもしれませんが実際に茶道には「喫茶去（きっさこ）」という言葉があり、この言葉はその文字の通りお茶を飲んで帰るだけという意味なのです。また、千利休の教えにも「茶の湯とは只湯をわかし茶をたてゝ飲むばかりなる事と知るべし」といった言葉が残っています。

この根本的な考えのもと、次第に、お客さんにより素敵な空間を提供したい、お客さんとともに楽しい時間を過ごしたいという想いからさまざまな道具が使われたり、さまざまな工夫や趣向が凝らされるようになり、それに対してお客さんの側もそうした亭主の心遣いに対して感謝の気持ちを大切にしたいということから作法が生まれてきたのだと言われます。

つまり作法は堅苦しい型…ではなく、「作法は相手に対する心遣い、感謝」なのです。私達が普段稽古しているのは多種多様なお手前なのですが、その一つ一つのお手前

に、そのお手前を考案した人の心遣いが込められています。その心遣いを紐解いていくのも茶道の楽しみ方の一つだと私は思います。「触れたことのない世界を、おいしく学べる」。それが茶道です！皆さんも一緒にお茶しましょう！



部長 喜田 直哉 (法・4年)

〈コメント〉

おいしいお茶を飲めば、誰だって笑顔になっちゃいますよ。

お茶はうまい。だから楽しいんです。



練習場所：学生交流棟4階 和室（豊中キャンパス）

練習日時：火曜（16時～）、土曜（10時～16時）

部員数：男8人 女7人

連絡先：喜田直哉 (k1d_goe@yahoo.co.jp)

中田絢子 (lsf-ayako@titan.ocn.ne.jp)

URL：http://handaitya.hp.infoseek.co.jp/

編集後記

冬のアイスホッケー・スキーから始まった今年の全国七大学総合体育大会（七大戦）は、主管校である大阪大学の14年ぶり5度目の優勝で幕を閉じました。2位の北海道大学とは2.5点差という接戦ではありましたが、宮原秀夫総長の希望通りに「総長の胴上げ」で締めくくることができました。出場された皆さんおめでとうございます。来年も優勝・2連覇を目指してがんばってください。

七大戦の熱戦が終わり、秋が深まってくる10月30日からは、総合学術博物館で特別展「「みる科学」の歴史―懐徳堂・中井履軒から超高压電子顕微鏡まで」が開催されます。11月3日から5日にかけては、博物館のある豊中キャンパスで大学祭「まちかね祭」も開催されますので、気持ちのよい秋晴れの日に、木々が色づき始めたキャンパスを歩いてみてはいかがでしょうか。（瀬尾）

ペッパーランチ 大阪大学「sora」店

食欲の秋、にぎわいを見せる食堂の中の一角から、何とも言えないステーキを焼くいい匂い・・・。

以前紹介しました学生交流棟の食堂「sora」の一角に今年6月オープンしました。

大学内にオープンしたのは2校目、西日本では初めてのお店です。本格的なステーキとペッパーライスが、早く、安く、美味しく楽しめ、女子学生にも人気です。

1日に150食以上のオーダーがある人気のランチ。

スポーツに、もちろん勉強に、仕事に、パワーを蓄えるためにステーキはいかがでしょう。

営業時間：10時～20時

定休日：大学の休業日

問い合わせ先：06（6846）8217



ベッパーステーキ（霜降り）（ライス付） 880円



ひるぜんセミナーハウス

大阪大学には、教職員の皆さんの研修・福利厚生を目的として設置されたセミナーハウスがあるのをご存知でしょうか。

場所は、西の軽井沢と言われる岡山県「蒜山高原」にあり、自然に囲まれた絶好の場所に位置しています。高速道路も延長され、米子自動車道「蒜山IC」から車で約10分。大阪からも約2時間で到着します。

四季を通じて様々に楽しめ、名峰「大山」が望め、温泉、スキー場も車で数分のところにあります。



30名近くが宿泊できますので（和室7室）、研究室のセミナー旅行やご家族の保養に是非ご利用下さい。（シーズンによっては、込み合いますのでお早めにご連絡下さい。）

（問い合わせ・予約）大阪大学総務部総務課総務係
TEL 06（6879）7014

交流協定大学紹介

デ・ラ・サール大学(フィリピン)

De La Salle University



デ・ラ・サール大学正門

デ・ラ・サール大学—マニラは、1911年にカトリックの教育修道会ラ・サール会（カトリック ラ・サール修道会）によって設立され、同大学の名称は聖ジャン・バティスト・ド・ラ・サール師に由来しています。

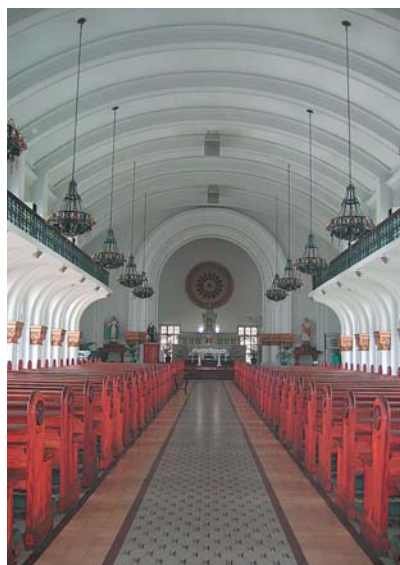
同大学は、教員、学生（大学と大学院）合わせて、約13,000の人数からなる総合大学です。大学の施設は、講義棟6棟、体育館、図書館、科学技術研究所等、充実しています。学部・研究科は、商業、コンピュータ科学技術、教育、工学、文学、科学の6つから構成されており、フィリピンの政治、経済、文化を支える人材が育成されています。同国の重要なポストに

就いている人材の1/3は同大学の卒業生であるといわれています。また、アジアだけでなく、世界各国で活躍している卒業生も少なくありません。

本学では、13年前から同大学との研究交流活動及び留学生の受け入れを継続して行い、着実に交流の基礎を築いてきました。これを受け、本年8月には大学間学術交流協定の締結に発展しました。この協定の調印式と併せて“7th DLSU-OU Science Research Workshop”を開催いたしました。両大学から多数ご参加いただき、学生たちも含めた活発な意見・情報交換を行い、盛会のうちに終了しました。

世界各国に広がるネットワークを持つデ・ラ・サール大学と交流することにより、アジア地域の発展と友好親善をリードする若い人材の育成、異文化交流に寄与することが期待できます。

所在地：2401 Taft Avenue, Manila 1004,
Philippines
<http://www.dlsu.edu.ph/>



La Salle Main Chapel

阪大 NOW No.92 2006 10月号

2006年10月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp